
新・仮面ライダーファイズA B！

断空我

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新・仮面ライダーファイズAB！

【Nコード】

N7120Y

【作者名】

断空我

【あらすじ】

あの戦いから二年後。世界は平和だった。しかし、裏では世界を超えた陰謀が着実に進んでいる。それに立ち向かうは赤き閃光を継ぐ者。戦いの果てにあるのはなんなのか、それは誰も知らない。これは平和を求める戦いの中で救済を探す物語。

ビギニング（前書き）

はじまりました。不定期ですが楽しんでください。

ビギニング

とある山中で対特殊生物自衛隊、通称特生自衛隊の隊員達は防護服と様々な機械を持つて洞窟の中を進んでいた。

『それにしても、これ・・・どこまで続くんだよ？かなり深いんじゃないか？』

先行している特生自衛隊隊員の一人、葉山進は壁に手をあてて悪態をつく。

『でも、反応が強くなっている・・・もう少しでたどり着くぞ』

仲間の関根健二が機械のメーターを見ながら進んでいく。

『なあ・・・家城』

『なに？』

先を歩いている家城に葉山が尋ねる。

『もし、この先にいるのが奴らだったらどうする？』

『それはないわ。この反応を見つけたフォンプレイバー自体が否定しているから』

『おい・・・あれ』

関根が何かを指差しているので、葉山と家城が光を当てると扉のよ
うなものがあつた。

『どうする？一旦戻るか？』

『・・・いいえ、行きましょう』

家城の言葉に二人は頷いて扉らしきものを押す。

ギ・ギ・ギ・ギ、とさび付いた音をたてて扉がゆっくりと開く。

『じじは・・・』

『研究室かなにか・・・みたいだな』

関根のいうとおり、様々な機械が埃をかぶっていて、机らしきもの
の上には赤い液体の入ったビーカーが複数置かれている。
研究室か実験室か何かだろう。

『おい！あれ！』

葉山が部屋の中央を指差す。

『“しらさぎ”・・・応答願います』

家城はヘルメットの通信機を起動させる。

『こちら“しらさぎ”何かあつたのか？』

通信相手は特生自衛隊の隊長、富樫だ。

家城は少し戸惑いながらも簡潔に目の前にある物の正体を告げる。

『“ベルト”・・・があります』

それが、この長く続く戦いの始まりの狼煙でもあった。

『罪人よ・・・』

『罪人よ・・・』

薄暗い路地裏から底冷えするような声が響き渡る。

その声に怯えながら一人の女性が後ろを時々振り返りながら逃げた。

逃げている女性の後ろをバツバツサと何かが羽ばたくような音が響き渡る。

『神は嘆き悲しんでおられます。愛していたのに、愛していたのに・・・と。神が流した涙を拭うために我々はやってきました』

段々と近づいてくる羽音に女性の恐怖は爆発寸前になる。

ゆっくりと振り返る女性の目に怪物の姿が映った。

背中に二枚の翼を生やし、口元にはおぞましい二本の牙、夜闇に羽ばたく不気味な怪物の牙がゆっくりと女性の喉下へ迫ってくる。

恐怖の余り女性が悲鳴を上げた。

『罪人よ。改めよ』

「罪人罪人、うっさいわよ！」

女性の悲鳴とは違う叫び声と同時に数発の銃弾が怪物の肩と頭を抉り取る。

突然の不意打ちを受けて怪物は壁に叩きつけられた。

女性が視線を向けると、バイクに乗った少女が手にベレッタM92Fを構えていた。

少女と銃という組み合わせのために女性の頭は混乱し始める。

「何やってんの！早く逃げて！」

少女にいわれて女性は躓きそうになりながらその場所から逃げ出す。

「ギ……ギギ……」

「気持ち悪い顔してるわね」

バイクから下りた少女、仲村ゆりはバイクから下りて銃を構えなおす。

「ギギギイイイ！」

怪物が叫びを上げながら羽を広げて襲い掛かってくる。

ゆりはそれに対して慌てず接近してきた怪物の顔に弾丸を何発か叩き込む。

弾丸は顔に当たって地面に落ちるが、目の近くを狙われたために、怪物は目を閉じる。

その隙にゆりは間合いを詰めた。

「それでも食べていなさい！」

怪物の口に手榴弾を二個押し込む。

そして、一気に怪物を通り越して地面に伏せる。

ボゴボゴッと怪物の体が大きく膨れあがり、数秒後には肉体が破裂して当たりに肉片が飛び散る。

「ふう……」

ゆりは体についた肉片をはらいながら携帯電話であるところに連絡する。

あと少ししたら肉体を回収するために人を寄越すだろう。

「……絶対、許さないわ」

小さく呟いてゆりはバイクに乗って道路に走り出す。

彼女がいた場所に落ちていた肉片から小さな機械みたいなものが転がり出た。

海鳴市。

風都、空夢町との間にある街で、海からの潮風が気持ちいい街である。

海鳴市の小さなアパートに音無結弦の姿があった。

「朝か……」

布団を畳んで私服に着替えて外に出ようとすると、傍においてある携帯電話から着信音が流れ出す。

「……もしもし？」

『お、出た出た』

「なんですか？ 鳩村先生」

電話の相手は音無が働いている小さな病院の医師で名を鳩村周五郎という。

彼と音無の出会いはおいておくとして、この時間帯に彼から電話がかかってくるのは珍しかった。

『実はさ、急患があつて、俺は今から隣町に出かけないといけなくなっちゃつてさ。悪いんだけど、他の患者さん。俺の代わりに診てもらえる？』

「いいですけど、医師免許とつたばかりの新人にやらせますか？」

『大丈夫大丈夫！ この天才外科医の鳩村先生が鍛えているんだから大丈夫！ ああ、それと生っすか！ サンデーを録画しておいてくれない？』

「……年齢考えろ」

ひとつ、という言葉を確認して音無は電話を切つて音無は入り口に

おいてあるヘルメットを手にとってアパートの部屋から出て行く。

「日向は・・・まだ帰ってきていないのか」

向かいの部屋の住人、日向秀樹は音無との友人であり仲間なのだが、ある理由でいつもバイクに乗って街を走っている。

彼は探さないといけない人がいるから。

どうしても見つけないといけない人。

音無はいない仲間のことを思いながら外に出る。

駐輪場に停車させてあるバイクに乗って音無は目的地へ向かう。

佐伯風華は海鳴駅から下りて周りを見渡す。

「ここが海鳴かぁ、潮風とか気持ちいいわね。ほら、大山君いくわよ」

「あ、はい！」

佐伯風華は助手であり部下の大山と一緒にホテルへと向かう。

彼女たちがここにきたのには理由がある。

最近、海鳴で怪事件が起きているという噂が流れていた。

それともう一つ。

彼女が気になっている事。

「（赤い仮面の戦士の噂・・・もし、その仮面ライダーが彼なら・・・）」

「佐伯さん、荷物少しくらい持ってくださいよ」

「大山君……」

「はい」

「頑張れ」

「そんなぁ！」

大山の悲鳴が海鳴の町に響いた。

人が少ない裏道、そこで異形が蠢いていた。

異形の怪物の前には不良達が全員地面に倒れている。

死んではいないようだが、かなり重傷である事が見てわかった。

『………ククク』

怪物は小さく笑ってどこかへと姿を消す。

海鳴にあるビジネスホテルをかりて大山と佐伯は部屋で今回の取材の内容について整理する。

「今回、僕達が海鳴にきた理由ってなんなんですか？」

「最近、この町でそっくりさんが現れているらしいの」

「それって、“ドッペルゲンガー”ですか？」

「そう、“ドッペルゲンガー”なの」

“ドッペルゲンガー” 自分で違う自分を見る現象の事で、自ら自分のドッペルゲンガーを目撃したものはその者の寿命が尽きる寸前の証という民間伝承もあり、未確認ながらも過去にその例らしきものが確認されている。

「でも、その情報って信頼できるんですか？いくらATASHIジャーナルがオカルトとか範囲に含まれているっていわれても明らかにウソなら信じてもらえないと思うんですけど？」

二人が所属しているATASHIジャーナルは数年の間に規模が大きくなり最近では幅広いジャンルを担当するようになっていた。オカルトもそのジャンルの一つなのだが、二人はオカルト担当ではない。

「最近、人手不足だからね。田井中編集長もばやいていたわ」

「いや、あれはさぼっているからじゃないですかね？」

困ったわね、という佐伯に対して大山は机の上にぐでーとしている編集長補佐の姿が脳裏に蘇っていた。

「とにかく、私達がやる事は、町に出て情報を集める事よ。運よくドッペルゲンガーについての情報を握っている人に取材の約束を取り付けられたから幸いいいわよ」

「そうですね！準備してきます」

「ええ」

十分後、二人は準備を終えてタクシーに乗って目的地へと向かっていく。

『ギャアアアア！』

薄暗い路地裏で怪物が地面をゴロゴロと転がる。

怪物が転がってきた方向には体中に赤いエネルギー流動経路・フォトンストリームが流れており、体を覆う装甲は特殊合金ルナメタルで作られており普通の攻撃ではびくともしない、そして、仮面の前部分を半月のような黄色い複眼、そして鮫を燃したようなクラッシュヤーがついていた。

暗闇の中流動経路が赤く輝いていて、目に焼きついたら忘れる事はできないかもしれない。

『ギ・・・ギギギギ』

「・・・・・・・・」

怪物はどこか機械的な唸り声を上げながらコッチを見ている。お前は何者だと問いたいのだろう。

「・・・・・・・・」

一気に間合いを詰めたファイズは連打でパンチを叩き込む。相手の反撃を許さない強力な一撃を最後に受けて怪物は狭い壁に叩きつけられた。

『・・・ギ・・・ギギ』

「・・・・・・・・許せ」

ファイズは一旦、怪物に距離を置いてだっ、と一気に駆け出す。
怪物が何かするよりも早くファイズのキックを受けて怪物は大きく
後ろに飛んで壁に叩きつけられた。

『て・・・・・・・・ぐおおおおおおおおお！？』

体に マークが浮かび上がり爆発する。

ファイズの周りに大量の肉片と機械の残骸のようなものが乱雑した。

「・・・・・・・・」

周りの肉片に関して何か思うところがあるのかファイズは周囲の肉
片を全て集めて骨壺のような箱の中に仕舞いこむ。

そして、近くに停車させていたオートバジンに乗り込んだ。

セカンド・コンタクト

「・・・腹減った」

音無はバイクを止めてある店へと入っていく。

「千回死んでこおおおおおい！」

店の看板にはレストラン相田と書かれてある。

入った直後、音無のすぐ横を客らしき人物が吹っ飛んでいく。そう、文字通り飛んで行った。

「またか・・・野田」

音無の目の前で細長い棒のようなものを狭い店内で構えた目つきの悪い野田が立っていた。

「なんだ、お前も店の悪口をいいにぐっ！」

「大事なお客様になにしてんの！」

パソコンと野田の頭上にフライパンが叩き込まれて地面にうずくまる野田の前にこの店の店主の娘、相田エリコがやってくる。

気の強い彼女の前に野田はなにもいわずに厨房へと戻っていく。

「いらっしやい。音無君。何にする？」

「チャーシュー麺で」

「はいはい、お父さん。チャーシュー一丁!」

音無は席に座る。

この店の店主、相田伊三と相田エリコの二人で経営しているのだが、この店にバイトしている風変わり人間が何人かいて、その一人が先ほどの野田だ。

料理の腕はそこそこあるのだが、店の悪口を言う客に対しては容赦ない。もつとも、彼の認識する悪口と一般的な悪口の間に大きな溝があるのを音無は知っている。

「はい、チャーシューお待ち」

「ああ……つて、待て」

「なんだ?」

運ばれてきたチャーシューは確かにチャーシューだ。但し。

「なんでチャーシュー麺なのに、肉うどんの肉が入っているんだよ! 松下五段!」

「あ……しまった」

運んできたウェイター、松下五段は肉うどんが好物で、どんなことでも肉うどんを取りきの内容に出せば引き受けてくれるという優しいのか扱いやすいのかわかりにくい相手だ。

「まあ、食べてくれ。おいしいから」

「・・・ああ」

音無はため息を吐きながらふーふー、と何度も麺に息を吹きかけながら食べ始める。

それを見ていたエリコが不思議そうな顔をして尋ねた。

「音無君って、変わっているわよね？猫舌なのにいつもラーメン頼んでさ。冷麺くらい作れるよ？」

「別にいいんだよ。これが好きだからさ」

「まあいいけど、あ、生っすか始まる！」

エリコはテレビのリモコンのチャンネルを変える。

すると、テレビの画面に765プロのアイドル、天海春香、如月千早、星井美希の三人が映った。

『では、早速今日のトップバッターは！』

「あ、始まった！」

「はぁ・・・」

音無はため息を吐いて目の前のテレビを見る。

テレビには最近売れているアイドル達・765プロのアイドル全員によるコメディ番組が始まっていた。

765プロに所属しているアイドル達は二年前に急激に人気上昇して、今では国内で知らないものは少ないといえるレベルの人気がある。

そんな彼女達が様々な事をするのが生っすか！サンデーだ。

その頃、佐伯風華と大山は情報を提供してくれる人が指定した場所へとやってきていた。

人通りが少ない工場地帯で待っていた。

「情報提供にしてはやけに人が少ないですね。誰かに聞かれるのを恐れて・・・かな？」

「それなら人ごみが多い方がいいはずよ。木の葉を隠すなら森の中という風に人ごみなら戯言として処理されやすいのに・・・」

おかしいわね」

記者としての勘が危険信号を打ち鳴らしていた。こつという時はすぐに場所を離れるのが得策なのだが、貴重な情報を得られるためにはどんな危険な事でも覚悟しなければならない。

『グルルルルル』

もつとも、それが前人未到に近い“怪人”の出現であれば彼女の許容範囲の危険を超えている。

「か、怪物!？」

『・・・ジャマモノ・・・ハイジヨ』

どこか機械的な言葉を呟きながらバイクのような外見をしたアクセルドーパントは体から炎を吹き出す。

ドーパント・風都に存在していた秘密組織ミュージアムにより製造されていた特殊アイテム・ガイアメモリを普通の人間が使うことにより超常的な力を得ることができた。

しかし、今やガイアメモリを見ることは少ない。なぜなら。

「大山君!危ない!」

アクセルドーパントが炎を纏ったのを見て佐伯は隣にいた大山を突き飛ばす。

彼がいた場所を炎のタイヤのようなものが通過した。地面には焼け焦げた跡がある。

「大丈夫？」

「あ．．．はい、でも、かなり危ないですよね！？」

「そうね．．．とにかくここから逃げるわよ！」

大山の手を引いて逃げようとする佐伯の横を足がバイクの車輪へと変形したアクセルドーパントが行く手を遮るために動いて道を塞ぐ。

『ハイジヨ．．．ハイジヨ．．．ハイジヨオ！』

機械的な言葉を呟きながら掌に炎を纏ってゆっくりと佐伯達に迫ってくる。

「ひっ！」

「あ．．．．っ」

恐怖で座り込む大山、それに対して佐伯の脳裏にはある出来事が蘇っていた。

火の中で叫び夫婦に向かって叫んでいる小さな時の．．．。

ブオオオオオオオオオン！

佐伯の思考を破壊するかのよう一台のバイクのタイヤがアクセルドーパントに命中してごろごろと地面を転がる。

バイクはギュルルと音を立てて佐伯達の前に停車する。

その姿を見た二人は同時に声を漏らす。

ファイズは停車しているオートバジンに跨りアクセルを回してアクセルドーパントを追跡する。

佐伯達は呆然と先ほどの光景を見ていた。

アクセルドーパントは炎の車輪となりながら公道を走っている。

幸い、対向車がないから被害はまだない。

その後ろをオートバジンに乗ったファイズが追跡していた。

「・・・これ以上は行かせない」

ファイズはベルトからファイズフォンを外してフォンブラスターモードへと切り替えて103を入力する。

『Single Mode』

ファイズフォンからレーザーが放たれて攻撃を受けたアクセルドーパントの軌道が大きく変わった。

その隙にファイズは大きく回りこんで、ベルトの側面に装着されているカメラ型の武器ファイズショットを取り出してミッシェンメモリーを差し込む。

『Ready』

ファイズフォンを開いてEnterキーを押す。

『Exceed Charge』

音声と同時にベルトの左側面から光がフォトンブラットの周りを走ってファイズショットにエネルギーがチャージされる。

アクセルドーパントは炎を強く吹き上げながらファイズへ迫った。

「うおりゃあ！」

ファイズはファイズショットによる必殺技“グランインパクト”を放つ。

必殺技を受けたアクセルドーパントの体からのマークが浮かび上がり爆発する。

佐伯風華達が追いつくと既に戦闘は終わっていた。

「・・・・一つ目」

ファイズの手の中には細長いAと書かれた赤いガイアメモリが握られていて、少し眺めた後、それを握りつぶす。

「すごい・・・」

大山が感想を呟いていると、一台の車がファイズに向かってぶつかる。

いや、ぶつかる手前にファイズが手を出して車体を受け止めていた。車の衝撃によりファイズの体は先ほどより少し後ろに下がっている。

「今度はなに！？」

驚くのはこれからだった。

車を壊しながら銀色のアーマーのようなものを纏った男二人がファイズに襲い掛かってくる。

ファイズは男達二人の拳を受け止めてそのまま車から投げ飛ばす。

投げ飛ばされた二人は地面に倒れる事はなく、それどころか足からジェット噴射のようなものを噴き出して着地する。

「えええええっ！？あれ人じゃないの？」

大山が絶叫して驚く、もちろん佐伯も驚いている。

男達二人はどこかぎこちない動きでファイズに襲い掛かろうとした。しかし、それよりも早くファイズフォンをフオンブラスターへと切り替えてコードを入力しトリガーを引いていた。

赤い光が男達を貫いた。

男達は悲鳴を上げることなくそのまま止まる。

「ウソ・・・あれ、ロボットなの！？」

動かなくなった男達に背を向けたファイズだが、

「危ない！」

佐伯の叫び声にファイズの反応が一瞬遅れた。

機能停止していたと思っていた男達が急に活動を再開してファイズに抱きつこうとせまったのである。

反応が遅れていたファイズはよける事ができない。

しかし、男達がファイズに何かをする事はできなかった。

停車していたオートバジンがオートで動き出して男達を突き飛ばしたからだ。

男達は積み重なるようにして倒れてそのまま爆発を起こす。

「きゃっ！」

「わっ！」

爆風に煽られて二人はしりもちをつく。

「・・・いない!？」

爆風が消えたとき、そこにはファイズの姿はなかった。

「おのれえ、ファイズう！」

薄暗い空間で一人の男が拳を座っていた椅子に叩きつけた。

目の前には複数の画面があり、そのどれもが黒い戦士ファイズを映していた。

そして、ひとつのカメラがファイズを襲撃した男達の残骸を映している。

骨や肉片だけではなく赤いケーブルや機械のようなものが紛れ込んでいた。

男達は映像を見ている男によってサイボーグとして製造されたのである。

なんのために？それを知る者はいない。

「“TOMEMORI”を失った事は大きい。しかし・・・」

男はにやりと口元を歪めた。

「私の計画が暴露されたわけではない・・・ファイズよ。せいぜい地面をはいつくばって足掻くといい。無駄な事をな！」

セカンド・コンタクト（後書き）

どうも、ファイズ第二話更新することにしました。

基本、こっちの作品はドラゴンナイト優先であるので比較的遅くするつもりでしたが、話を進めるにあたって、意見が欲しくなったので投稿することにしました。

んで、その内容というのがファイズの根本に関わる話なので、意見が欲しいです。

にじふあんを利用している人なら知っていると思うのですが転生者を登場させようと思っています。

といっても、主役になるわけではありません。

とにかく転生者を出そうと思っていて、どのような形に出すかはここでは述べられません。

もし、転生者についての意見してもいいよ〜という心優しい人がいてくれたらコメントしてください。

メッセージで転生者について書くつもりなので。

赤き閃光の継承と深い絶望（前書き）

関係ない話ですけど、最近、ドクター真木を演じている人がドラマでみるのが大くなったような気がする。

赤き閃光の継承と深い絶望

その事件は唐突に起きた。

海鳴での連続殺人事件。

被害者達の接点は一切なし、狙われる動機もわからない。

しかし、殺害方法は全て同一。

レーザーか何かのようなもので骨一つ残さず殺されている。

そして、現場では同一の証言が得られていた。

“黄色い二つ目の仮面をつけた怪物が殺した”・・・と。

「この情報って・・・あの時僕らを助けてくれたアイツですよね？」

「そうかも・・・でも、おかしいわ。私たちの事を助けてくれたのに人を殺害するなんて」

その後、二人は満身創痍のまま騒動を聞きつけてやってきた警察官により海鳴署に連れて行かれて事情聴取を受けてようやく解放されたときに近くの私服警官が話している内容が耳に飛んできたのである。

「調べてみましょう・・・この事件、ドッペルゲンガーのことも少なからず関与しているはずよ」

「根拠・・・あるんですか？」

「ないわ。女の勘よ」

「ええええええええ！？」

「さあ、行くわよ」

大山の叫びを無視して佐伯は情報を得るために町へ繰り出す。

その日、小学生の雄太は学校へ向かっている途中に銀色の時計を見つける。

なんだろう？と思いつつ時計を持ち上げるとかちりとガラス部分が蓋のようにあがり、まるで虫眼鏡のようなものになった。

「なんだあ・・・これ？」

雄太は不思議に思いながらレンズを覗き込む。

丁度、彼の前を一人のサラリーマンが通り過ぎていく。

「・・・・あれ？」

その時、雄太はレンズを通しておかしなものを見た。

気になりつつ近くで弁当を売っているおばさんを見る。

それも同じ結果だったので、雄太はレンズから顔を離して首をかしげた。

「（どうして、みんなの顔がロボットになっているんだろう？）」「

レンズを通してみるとどういうわけか、顔がロボットになっているのと、そうでない普通の人の顔というものが映るのだ。

不思議に思っていると近くから男二人のひそひそ声らしきものが聞こえてくる。

『おい、なんでそんな大事なものを落とすんだよ』

『すまない・・・』

『早く見つけ出さないとやばいぞ、“アレ”は俺達でも見分けがつかないくらい精巧に出来ているんだ。落としたって知られたらゴッド野口様になんて説明をするんだ』

「・・・ロボット？」

男達の言葉に首を傾げつつ雄太は学校に向かって歩いていく。

「・・・こいつはひどい」

海鳴署勤務の警官は目の前の死体に感想を漏らす。
目の前に転がっている死体は完全に灰と化していて素顔を確認する事ができないし、完全に灰となっているので身元確認をするための物全てが失われている。

「確かに、こいつはひどいな」

「ちょっと・・・あんた！」

押しのけてやってきた刑事に制服警官が文句を言おうとするが男は懐から警察手帳を見せる。

手帳には警視庁捜査一課小室源介と書かれていた。

「警視庁捜査一課の小室だ。一体、何が起こってんだ？」

「困りますな。ここは警視庁の管轄ではないはずですよ？」

「そんなことはどうでもいんだよ。あんたがここの責任者か？」

「ええ」

やってきた刑事に対して小室ははっ、と小ばかにしたような笑みを浮かべる。

「そうかい、俺はもう確認したから後は頑張りな」

「っ」

小室の言葉に刑事は顔をしかめるが、小室は気にした様子もなく去っていく。

その様子を野次馬の中で見ていた男の一人は無表情になり小室の後ろを尾行する。

雄太は学校の授業が終わって通学路を歩いていた。

「これ・・・本当になんなんだろう？」

学校に行く途中で拾った時計を教師に没収されないように隠し持っていたのだが、どうにも気になって仕方がなく。雄太は帰り道ポケットから取り出して眺めていた。

あれからどこをどういじっても時計はの蓋が開く事はなく、確認できない。

自分のみまちがいなのかどうか確認したいのでいじっていると、公園にある時計と腕時計の時間が違う事に気づく。

「おかしいなあ。さっきまで同じだったのに」

調節ネジを回そうとするとカチャリと時計の蓋が音を立てて開いた。

「こうすればよかったんだ」

「坊や、どうしたの？」

「え？」

後ろからおばあちゃんに声を掛けられて雄太は振り向く。

その時に彼は時計の蓋のレンズを通しておばあちゃんを見た。

雄太は驚きで目を見開く。なぜならそこにいたのは人ではなく、ロボットなのだから。

「うわあああああああ！」

ロボットに悲鳴を上げて雄太は逃げ出す。

公園を突っ切り、人が大勢いる歩道へと飛び出す。

走っている雄太を不思議に思っ何人かが「どうしたの？」「大丈夫？」

といった、声をかけてきてくれる人もいたけれど、雄太は誰にも止まることなく逃げ続けた。

話しかけてきている人がロボットかもしれない、という不安があった。

「・・・雄太君？」

しかし、彼の前に一人の女性が現れて雄太はつい、止まる。
なぜなら、その女性は彼がいつも行っているお店で働いているお姉さんだから。

「かなでおねえちゃん・・・？」

雄太は近づこうとして、ぴたりと止まって、手の中にあるレンズを奏に向ける。

もし、奏おねえちゃんがロボットだったら？という不安が心の中に残っているからであり、ロボットから逃げないといけないと思っていた。

しかし、レンズを通してみても彼女の顔がロボットになることはない。

「かなでおねえちゃん！！」

「わっ・・・雄太君。どうしたの？」

ロボットじゃないと安心して、雄太は目の前にいる立華奏に抱きついた。

奏は戸惑うような表情をしながらもまるで天使のような笑みを浮かべて雄太を抱きしめる。

しかし、その光景を見ている者がいることに誰も気づいていない。

音無結弦は海鳴診療所という小さな診療所の診察室でコーヒをふーふーと息を吹きかけながら飲んでいた。

「……暇だな。患者が来ないからか」

患者といっても体の調子が悪くなったから来るという人ではなく、暇で健康診断みたいに体を見てもらおうと考える人達がこの診療所にやってくる。

そのためか、地元の人達との繋がりはそのこあったりした。

しかし、毎日そういった患者がやってくるというわけではなく、何日かが空いたりと不定期だ。

さて、今日も平和かなあ？と音無が思っていると。

「おう、お邪魔するぞ……って、なんだ坊主しかいねえのか」

待合室のドアが開いて小室源介が入ってくる。

「小室さん。どうしたんですか？こんな小さな診療所に？どこか怪我でもしましたか？」

「そんなんじゃないよ。それに怪我したとしてもお前ん所の藪医者になんか見られたくねえよ」

相変わらずの鳩村に対しては容赦ないなあと思う音無。

実際の所、音無は警視庁の刑事であるこの小室源介と自分の師匠である鳩村周五郎がどうして仲がいいのかという詳しい経緯を知らない。

けれど、あの二人が固い絆で結ばれているという事だけは理解できた。

「結弦。いる？」

再び待合室のドアが開いて立華奏が入ってくる。

「あ……」

奏は小室と話している音無を見て邪魔だと思ったのか出て行こうとした。

「あ、別に気にしないでいいよ。それよりどうかしたのか……って、雄太君？」

音無は奏に手を握られておどおどと入ってきた雄太君に見覚えがあった。

何度か通学途中に怪我をした友達を連れて病院にやってきて、消毒液を塗ったりという治療をしている。

「一体……どうしたんだ？」

「雄太君……」

奏はそつと雄太の背中を押す。

雄太はポケットから腕時計を取り出して音無に差し出した。

「この時計……どうしたの？」

「これ見て……人を見たらロボットに見えた」

「なんだと？おい、ちょっと見せろ」

黙って話を聞いていた小室は腕時計を調べる。

調節ネジを触ったときにかちゃりと時計の蓋が開く。

「それを通して人を見たら何人かの人・・・金ぴかのロボットに見えた」

「・・・・・・・・？」

小室はふと、腕時計を持って外に出る。
音無も続いて外に出た。

「おいおい・・・どうなってんだ・・・こりゃ!？」

小室源介はレンズを通して歩いている人を見た。
その中に数人、横を通り過ぎた人の顔が金色のロボットのような顔をしている。

「こりゃ・・・・・・・・とんでもないものを」

「あれ？小室さん？」

「・・・・・・・・あなたは・・・・・・・・」

小室の前に現れたのは佐伯風華と大山だった。

「あれ・・・大山？」

「音無君!？久しぶりだね!」

大山に近づこうとした音無だが、小室が待て、といい。例の時計で二人を見る。

「よし、大丈夫だ」

「あの・・・何か？」

「いや、ここで立ち話するのはなんだから中へ入れ」

「ここで話すんですか？」

「他に安全な場所ないだろ」

小室に言われて音無は診療所の外に『本日休診』と書かれたプレートをかけておく。

佐伯風華たちが診療所に入るのを二人の男達が覗き込んでいた。

「あそこに“あれ”があるみたいだな」

「どうする？」

「上に連絡してレベル2を寄越してもらおう。あれなら強盗に見せかけての殺人など簡単に行なえる」

「よし」

男達はある場所へ連絡した。

しかし、数分後、その行いを彼らは一生かけて後悔する事となる。

「この時計、どこのメーカーのものでもないみたいですね」

診療所にあるパソコンで雄太君が拾った時計を調べてみたが、このメーカーでも取り扱っていないようだった。

佐伯風華と大山は待合室で雄太君と楽しくお話をしている。

「でも、雄太君はこれを持って震えていたわ」

「よほど怖い目にあっただろうな。とりあえずこれは鑑識に頼んで調べてもらったらなにか」

わかるかもしれないというとしたところで音無達のいた場所のすぐ近くの壁が砕けた。

「なっ！」

「おいおい・・・なんだっ！」

「なんてことをするんだ！」

奏と小室が身構えている横で音無は叫ぶ。

「壁修理するのにいくらかかかると思っているんだ！てか、どういう登場するんだよ！」

「んなバカなことをいっていないで、あいつら連れて逃げるぞ！」

「結弦急いで！」

音無の襟首を掴んで奏は診療所の外へと転がり出る。

どういいうわけか音無達以外に人の姿がなく、時間が静止してしまったかのような感じがした。

「どうなつてんだこりゃ！？」

「とにかく、小室さんか佐伯さんでもいいから車とってきうおおおおお！？」

診療所のドアを壊して“ソレ”は現れる。

身長200センチくらいはありそんな大男で右手は鋭い鉤爪のようなものを装備しているだけでなく、ボディや顔は鋼色の皮膚をしており明らかに人とは思えない。

「・・・・・・・・」

無言で大男は音無、奏、佐伯、小室、大山と見ていき、最後に雄太に目を止まった途端、真っ直ぐに雄太に向かって近づいていく。

「止まれ！」

「このっ！」

狙いが雄太だと気づいた小室と音無が怪人へ飛び掛るが左手が二人をなぎ払う。

まるで葉のように宙を舞って二人は少し離れた地面に叩きつけられる。

「奏！雄太君を連れて．．．逃げるオ！」

「結弦．．．わかった、雄太君！こっち」

奏は雄太の手を引いて幅が狭い裏通りへと走り出していく。

「私たちは車を取りにいくわよ！」

「はい！」

躓きそうになる大山が急いで佐伯と一緒に駐車場に向かって走った。

奏と雄太は狭い裏通りを走っていく。その後ろを巨体の怪人が進んでいく。しかし、怪人の体が大きすぎて左右の壁をゴリゴリと削っている。

壁を削っている音が段々と近づいてくるのに雄太は恐怖で体が支配されそうになるが、奏がそんな雄太の手をしっかりと握って前を、前へと進んでいく。

顔を上げて雄太は奏を見る。

どこまでも真っ直ぐな彼女になぜか雄太の心が温かいものに包まれる。

「雄太君！もうすぐ出口だよ」

奏の言葉に雄太は前を見る。

どこまでも暗かった場所を照らすように光が見えた。

もしかしたら助かるかもしれない。

いや、助かるんだ。

雄太は前へと進む。

そして、二人は路地裏を出た。

向こうから佐伯風華の運転するレンタカーが急停車して大山がドアを開ける。

雄太の顔に笑顔が浮かぶ。

直後、視界が暗転した。

「雄太君!？」

奏は後ろから現れた怪人が雄太の意識を奪ったのを見て叫び声を上げる。

怪人は雄太の頭部を掴んで捕まえてから奏へとゆっくりと近づく。

ここにいる人達全員を殺すつもりだ。

逃げる奏を始末するために怪人は右手の爪を繰り出した。

迫る爪を奏は避けられない。

このまま死ぬ?と思った瞬間、それは現れた。

『Exceed Charge』

奏を貫こうとした爪が腕から吹っ飛ぶ。

腕は宙を舞い地面に落下すると灰となって消滅する。

「・・・・・・あ」

目の前に現れたのは漆黒のアーマーを身に纏い、体に赤いフォトンブラットを見に纏ったファイズ。

怪人は破壊された腕を一瞥して残りの片方の腕だけでファイズに襲い掛かる。

「うらっ！」

手を弾いてファイズは怪人の腹に拳を数発叩き込む。

拳を受けた怪人はズザザと後ろへ下がるがすぐに体勢を立て直して襲い掛かる。

実際の所、戦況はファイズに傾いていた。

怪人・・・否改造兵士レベル2は自身の武器といえる右腕を破壊されているため戦闘能力が著しく低下しており、脅威ではない。

「よっ・・・と！」

ファイズは改造兵士レベル2に強力なキックを叩き込んで距離をあける。

ベルトのミッションメモリーを外して、腰に装備されているファイズショットを外してメモリーを差し込む。

『Ready』

ベルトに固定されているファイズフォンを開いてEnetrキーを押す。

『ExceedCharge』

とどめをさすために必殺技を刺そうとしたファイズの手から大量の灰が零れ落ちた。

「ぐっ！」

手からファイズショットを落として自身の手を見つめる。

「こんな時に・・・!？」

動揺しているファイズを見て何を思ったのか改造兵士レベル2は突如、抱きついた。

なに、をと動揺していると改造兵士レベル2の顔面が開いて赤いランプのようなものが点滅していく。

直後、大爆発が起こる。

爆風から雄太を守るために奏は伏せた。

少しして爆風がおさまって顔を上げるとファイズと改造兵士レベル2がいた場所は黒い跡のようなものが形成されている。

改造兵士の残骸らしきものが散らばっていた。

そしてすぐ近くにファイズが倒れていた。

「奏!・・・っ、これは・・・」

爆風で察知したのか音無結弦が駆け寄ってくる。

これで助かったかもしれないと奏が思った時、近くに車が停車して奏と雄太を中へと連れ込む。

音無が何かを叫んでこっちへ駆け寄ろうとしているが、車は発車して離れていく。

「奏え!」

離れていく車に音無は追いつこうとするがどうしても追いつけない。すると、煙の向こうからファイズが起き上がろうとしているのが見える。

「おい!大丈夫か!？」

ファイズは駆け寄ってきた音無の服を掴んだ。

突然の事に戸惑うが、なぜか音無の頭は酷く冷静でいた。

「時間がない……僕はもう……戦う事が出来ない」

ファイズの手から大量の灰が零れ落ちていく。

もう、命が短いということを理解する。

「だから……キミにこれを使ってほしい」

ファイズは自身のベルトを外して、ベルトを音無に押し付ける。

音無は抵抗することなくそのベルトを受け取った。

ずっしりと重たい感覚が手にやってくる。

「キミになら……ファイズを使いこなせる……それに……
止めてほしい。奴らを……」

「奴ら……？」

「こことは違う世界から……暗躍している奴らを……」

震える口でゆっくりと語り始める。

こことは異なる世界。

その世界を事実上支配している組織、その組織の中にいる“ある
連中”がこの地球を支配しようと暗躍しているという事。

それを止めてほしいと訴える。

「………わかった」

音無の言葉を聞いて安堵の表情を浮かべてファイズの装着者だった

人物は安堵の表情を浮かべて目を閉じる。

「ありがとう・・・これで、安心して彼のところにいけるよ・・・
・・・さよなら」

さよなら、そういつて音無の手の中にいた人物が体から青い炎を吹き出して灰となって消滅してしまう。

「私たちをどうするつもり！」

「どうもしないさ。ただの餌だ」

「・・・餌？」

「お前らをファイズは守ろうとしたからな。ファイズにとって人はすべて守るべき存在だということらしいからな・・・くらだねえ」

奏は雄太を守るように抱きしめながら目の前に座っている男に尋ねる。

男は王座のようなものに座り何が面白いのかにやりと笑っていた。

「くだらない・・・？」

「ああ。くだないねえ。扱いやすいがすぐに壊れてしまう。それに比べて“こいつ”らは壊れてもすぐに修理できるからな」

「貴方は人を道具としか思っていないの？」

「だから俺の部下はこいつらしいかない。そんなことも気づかない

から人間っていうのは嫌いなんだよ・・・」

男は面倒だという表情をして語る。

「特に、正義の味方が悪党を叩き潰すなんていう事を実行しようとするヤツは大嫌いなんだよなあ！」

直後、壁を壊して一台のバイクが現れる。

バイクは転倒してそのまま近くの機材を壊しながら止まった。

「はあ・・・はあ・・・」

ヘルメットを投げ捨てて音無は起き上がる。

「おやあ・・・あの男と違うようだか？」

男は音無を見ながら笑う。

「あの人は死んだ・・・」

震える声でいいながら音無はベルトを腰に巻く。

「どうしてこんなものをあの人が俺に託したのかはわからない」

「おいおい、こんなところで演説するなら他所でやってくんない？
お前らもぼーっとしてないでとっととやれ」

男の傍に控えていた改造兵士レベル2は長い腕を動かしてゆっくりと音無に迫っていく。

音無は逃げることなくファイズフォンを開いてコード『555』を

入力する。

「けれど、なぜかあの人が何を止めたいのかというのはわかった」

Enterキーを押す。

『StandingBy』

「こんなことが起きるのを阻止しようとしていたんだ！誰かが止めないといけないというなら俺が止める！」

叫んでファイズフォンを天へ掲げるようにして突き上げ叫ぶ。

己の姿を変えるための、決意を形にするための言葉。

「変身！」

『Complete』

暗い部屋の中を赤い光が包み込み、音無の顔を抉ろうとしていた改造兵士レベル2はフォトンブラットを纏ったファイズの拳を受けて近くの機材に倒れ込む。

拳を受けた皮膚はめり込み、口の端から泡がぶくぶくと噴き出ている。

暗闇の中全身のフォトンブラットのラインが輝き、ファイズはゆっくりと前へ歩いていく。

仲間がやられたことに動揺しつつも改造兵士レベル2は丸太のように太い腕を振るう。

「がっ！」

横から迫った腕を両腕で受け止める。

衝撃で横にずざと傾くがなんとかこらえて。

「こっ……のおおおおおおおおおお！」

腕を掴んでぐるぐると振り回す。

改造兵士レベル2を投球のように投げ飛ばした。

バキキツ！と機材をいくつも壊しながら飛んでいき、壁に激突したらぴくり、とも動かなくなる。

「残るはあんただけだ……奏と雄太君を解放して……そして大人しく警察に自首しろ」

あっさりと改造兵士レベル2を叩きのめしたファイズは椅子に座っている男に問う。

「何がおかしい！」

「そりやおかしいさ。警察に自首しろって？この世界の人間でもない俺が？」

「この世界の……」

「人間じゃない？」

ファイズと奏が声を漏らす。

「そうさ。あの男から何も聞いていなかったのか？俺はこの世界の人間ではない、こことは異なる別の世界からやってきた。だからこの世界の法律に俺が当てはまる事はないし。なにより」

続きを言おうとした男は倒れている改造兵士レベル2をみて、何か思いついたのかにやりとさらに口元を三日月のようにゆがめた。

「この世界の法律で罰せられるとしたらお前さんじゃないのかい？
ファイズ」

「・・・どういうことだ？」

「お前があつさりと叩き潰した。こいつら改造兵士レベル2は口ボツトじゃない・・・この世界の人間を素材として使っている」

「なんだと！」

男の言葉にファイズが叫ぶ。
ファイズ「音無は動揺する。
彼は医者だ。

医者は人の命を救うのが仕事。
その医者が人の命を奪うなんていう事をすれば、それは医者ではない。
い。

ただの人殺しということになる。
そして、

音無は人を殺した。

「・・・ああ・・・」

ファイズは自身の手を見る。
暗くてあまり意識していなかったが手がべっとりと何かの液体で汚れていた。

あ．．．．あ．．．．と、地面に座り込んでしまっている音無を
見ていることしか出来なかった。

彼を救う手立ては今．．．．ない。

赤き閃光の継承と深い絶望（後書き）

さて、三話でいきなり暗い話になってしまいましたが、それはそれ、これはこれで、今回の話ですが、ジャンパーソンというメタルヒーローをごそんじでしょうか？

その話にある「俺が正義」という作品をベースにしています。

ちなみにこの事件はまだ終わっていません。

そして、次回、早速というわけではないですが、平成ライダーが一人登場します。

深い絶望に落とされた音無を救ってくれるであろうどこまでも元気で暑苦しい男が！

苦・悩・再・来（前書き）

タイトルはなんとなーくです。

そして、今回登場するライダーは誰もが予測したであろうあのライダーです。

苦・悩・再・来

「早速だが、伝える事が二つある」

薄暗い空間、そこには黒く大きな円卓があつて複数の人が囲むようにして座っている。

「なにになに」

「てか、こんな風に囲む必要つてあんの？」

「雰囲気大事でしょ？」

「一つ目、ファイズの死亡が確認された」

「おー！とうとうあいつくたばったのお！？」

「長かったな」

「かるーく10年か」

「それで、もう一つはなんなのさ？」

「新たなファイズが確認された」

「おいおいおい！消えたと思ったらまた現れたの！？」

「よほど、我らを処分させたいようだな」

「でも、“ヤツ”はこの世界に手をだすことはできない」

「といってもあの二人がこちらに影響を出しているのは事実だ。既に753の施設が破壊されている」

「それに加えてファイズとなると……うつぜえなあ」

「そこで今、地球に居るアイツにT0を一個送る」

「送るって……」

「26ある中の2つ破壊されてんだぜ？」

「もし、ファイズに破壊されたらどうすんだよ！」

「でも、いいんじゃない？」

「そーだよ。こっち来る事は不可能に近いんだから刺客送り込んでもいいんじゃない？」

「暇つぶしにもなるしねー」

暗闇の中で飛び交う声に最初に声をあげた人物が言う。

「これは決定だ。T0メモリを送る。異論はないな？」

その声に反論するものは居ない。

「でもさあ。場所が場所なんじゃない？」

「そうだね。情報では“ここ”にいるらしいし、“あちら”に伺いたてておいた方がいいんじゃない？」

「既に行なっている。後は行動を起こすだけだ」

「早いね」

「さーで、それだけなら俺はそろそろいくわ」

「僕も」

「私も」

「暇つぶしになりそうながあつたら教えてくれよ」

そして、全員が消える。

否、一人だけ残っていた。

「ファイズ……どこまでも我々の邪魔をするというのか」

「失礼します」

「おお。奏ちゃん。いらっしやい」

海鳴にある小さな診療所、立華奏は普段からそこにいるであろう音無結弦に会いに来たけれど、そこにいたのは“天才外科医”鳩村周五郎だった。

「鳩村先生……結弦は？」

「あいつはある町にある学校の保健室にいつてもらってる」

「そう……ですか」

「小室さんから事情は聞いているけど。今のアイツを立ち直らせるのはかなり大変な事だぞ」

「……はい」

奏は音無結弦がどれほどまでに医者という職業に誇りを持っていたのかを知っている。

そんな彼が夢を叶えて医者となつて、医者のやることと真逆のことをやってしまったことで心に深い傷を残してしまった。

こればかりは天才外科医である鳩村ですら治す事もできない。

「結弦……」

あの、騒動の後、意識を取り戻した小室と遅れてやってきた風華達によりあの不気味な施設から脱出した。

音無はショックを受けて部屋に籠ってしまう。

小室が後日、あの施設へ向かうと建物ごと奇麗さっぱり“まるで存在していなかった”かのごとく消えていた。

天ノ川学園高校に保険医として行くこととなった。

あの事件からずっと、自室で籠っていた音無だが、唐突に師匠であ

る鳩村周五郎がやってきて。

「診療所来る気ないならここいけ！」

と天ノ川学園高校の住所などを押し付けられて音無は天ノ川学園の保健室でぼーっとしていたのだが、唐突にそれは崩された。

なぜか、それは。

「先生~~~~！ゲンちゃんの頭から血が流れているんです~~~~！対処してくださいーい！」

「ユウキ！俺は大丈夫だっていつてるだろう！？たかだかこの程度でつてえ！」

「とりあえず消毒でもしてもらえ如月」

「じっとして」

淡々とした表情で消毒液を吹きかけて簡単な治療を行なう。
部屋に入ってきたのは三人の生徒、うち二人は天ノ川学園の制服を着ているのだがうち一人はリーゼント頭の短ラン姿。

「ちょっと！弦太郎が怪我をしたって聞いたんだけど！」

「大丈夫なのか！？」

保健室のドアが開いて天ノ川学園高校のクイーンである風城美羽、そしてキングである大文字隼。

さらにはJKと名乗る本名不明のチャラ男、野座間友子という少女

が次々と入ってきた。

「キミ達、賑やかだね」

「おう！ダチだからな！」

「……………ダチね」

「……………あんた……」

目の前に居るリーゼント頭の少年が何か言おうとした時、突如、保健室の壁が壊れて何かが侵入してきた。

「な、」

「なんだあ！？」

リーゼント頭達と音無が身構えていると壁を壊して一体の怪物が現れる。

その姿を見て音無は顔を引きつらせた。

全身を灰色の筋肉、顔に至ってはロボットとしか思えない造り。

音無はそれを知っている。

『……………ベルト……………よこせ』

改造兵士レベル2は太い腕を伸ばして音無へ迫る。

「あぶねえ！」

音無へ繰り出される拳は弦太郎による飛び蹴りを改造兵士レベル2

の攻撃の軌道がずれてすぐ横の壁にめり込む。

「よくわかんねえけど。てめえの相手は俺がしてやるぜ！」

弦太郎は懷からフォーゼドライバーを腰に巻いて赤いレバーを四つ押していく。

『3』

『2』

『1』

「変身！」

ベルトについているレバーを押して手を上へ伸ばす。

白い煙に包まれたと思うと煙を裂いて姿を見せる。

全身が白く、頭部はロケットを模したような仮面で隠されている。

アストロスイッチと呼ばれる宇宙の力を宿したスイッチを使って戦う存在。

都市伝説となっている仮面ライダーという称号を使用する。
名を仮面ライダーフォーゼ。

「宇宙キターー！」

「・・・・・・は？」

フォーゼの言葉に音無はぽかんとした表情を浮かべた。

「仮面ライダーフォーゼ。タイムンうおっ！？」

最後までいうまえに改造兵士レベル2の太い腕がフォーゼを投げ飛ばす。

投げ飛ばされたフォーゼは外へと飛び出た。

「おい！人の話は最後まできけっつーの！」

怒鳴りながらフォーゼはベルトの二番目と四番目のスイッチを押す。

『ランチャー・オン』

『レーダー・オン』

フォーゼの右足と左腕にランチャーモジュール、レーダーモジュールがマテリアライズされる。

「これでもくらいやがれ！」

ランチャーモジュールから放たれるロケット弾が改造兵士レベル2に命中した。

「よし、もういつ」

もういつちょ、と言おうとした所で横からトラックが走ってきてフォーゼに激突する。

「つてえ・・・！」

「ゲンちゃん!？」

「oops!」

フォーゼがごろごろと転がっている間に改造兵士レベル2は姿を消す。

「あれ・・・このトラック無人つすよ!？」

「なにい!？」

変身を解除した弦太郎やユウキ達が近づいてみると確かにトラックには誰も乗っていないかった。

保健室の椅子にもたれて音無は足元に置かれているベルトを見ていた。

あの敵の狙いはおそらくこれだ。

これを捨てれば自分はもう関わらずに済む。
けれど、

「なんで・・・俺はこれを捨てることができないんだ」

そんな音無の苦悩を友子が見ていた。

廃部となっている部室。

そこにあるロッカーには月面にある基地。ラピッドハッチ。

そこは仮面ライダー部の部屋としても使われている。

「調べた結果。あれはゾディーアーツじゃない」

「え？」

「どういうことなの！賢吾君」

賢吾が使うアストロスイッチカバンの画面には先ほど出現した改造兵士レベル2の状態が表示されていて、見ている限り。

「ゾディアーツというわけじゃないなら……あれ何なのかしら？」

「……………」

「友子？さつきから黙ってどーしたんだ？」

弦太郎は黙っている友子へ尋ねる。

「あのアタツシケース……スイッチと似たような感じがした」

友子へ視線が集まった。

「アタツシケースって？」

「あの保健室の先生が持っていた……」

「まさか、あの人がゾディアーツに関わっているとでも言うのか？」

「でも、タイミング的にもありえないとはいいきれないわね」

「どっつするっ？」

大文字の言葉に弦太郎が立ち上がり拳を天井へ向ける。

「俺はあの人が悪い人にみえねえ！それに・・・何か悩みがあるようにみえた。だから俺があの人とダチになる！そつから話を聞いてみせる！」

「ゲンちゃん・・・」

「まあ、如月がこういうのだからなんとかなる・・・かもしれない」

「さっすが弦太郎さん。んじゃ俺はちよつと調べてみますね」

その日から如月弦太郎による音無へのアタック？が始まる。

薄暗い部屋、そこには赤い目をした男、天ノ川学園高校理事長我望光明と全身を黒いローブに身を包んだ人物が居た。

「ほう、この学園で暴れたいと？」

「こんなことを突然言い出すのは迷惑かもしれません。ですが我々としては早急に潰さなければならぬ敵がいるので」

「こちらとしては生徒に危害を加えたりしなければ問題はない・・・だが、その手の中にある力をこちらに向ければ・・・こちらとしても攻撃しないといけなくなるがいいのかな？」

我望の言葉にフードの人物はぴくりと動いてあるものを見せる。

「それは少し前に財団Xに渡したスイッチだね。成る程。スポンサーが同じなのかな？」

「まあ、そこはお互い詮索するのはやめましょう。私は使者としてこちらに來ただけで。このスイッチも私の仲間が使っただけです・・・・そちらの計画の邪魔をしないように釘をさしておきます・・・・それでは」

「よろしいのですか？」

「構わんよ。こっちのことに手を出してこなければ。それにフォーゼがほうっておくわけないだろうしね」

「成る程・・・」

「というわけでリブラ、あちらの用事が終わるまで少し行動を控えておいてくれたまえ」

「わかりました」

「先生！」

「ん？」

放課後になり音無はボロボロのバイクに乗ろうとしたところで如月弦太郎がやってくる。
なんだ？と思っていると。

「先生！俺とダチになりましょう！」

「・・・・・・え？」

「ですから！俺とダチになってください！」

「またの機会にさせてもらおうよ」

ばつさりと切り捨てて音無はバイクに乗って外に出ようとする。
しかし、弦太郎もそれで諦めるわけがない。

「待ってくれ！俺は学校のすべての人と友達になるんだ！だからあんたともダチになる」

「そうか、頑張れ」

どこまでも冷たい態度の音無に対して弦太郎はめげずについてこようとする。

だが、突如爆発が起こって二人は倒れ込む。

「な、なんだあ！？」

「っ！？」

目の前に現れたのは先ほど姿を消した改造兵士レベル2、そして。

「なっ！？お前は倒したはずだぞ！」

少し前、天ノ川学園高校を火の海に変えようとした律子という生徒

が変身していたアルター・ゾディアーツが立っていた。
アルター・ゾディアーツの手に持つアラディアの先端から火炎弾を放つ。

「危ない！」

音無が弦太郎の手を引いて逃げる。

「ちよっ！先生！」

「お前はここに隠れている！」

震える声でいって、音無はアタッシュケースからベルトとファイズフォンを取り出して腰に巻く。

ファイズフォンを開いてコード『555』を入力してEnterキーを押す。

『S t a n d i n g B y 』

「変身！」

『C o m p l e t e 』

赤い光に包まれてファイズへ変身する。

ファイズを見た弦太郎は驚きの表情を浮かべるしか出来ない。

「先生が……仮面ライダー！？」

「っ……………」

迫り来る改造兵士レベル2をに殴りかかりそのまま外へと連れ出す。
アルター・ゾディアーツも後を追う。

場所を近くの川原へとかえてファイズは拳を改造兵士レベル2へと放つ。

「うらっ！」

殴り飛ばして距離を置いた所でアルター・ゾディアーツの火炎攻撃が襲い掛かってくる。

「くっ・・・なら」

ファイズフォンを開いてコードを入力してフォンブラスターモードへと切り替えた。

『Single Mode』

「くられ！」

レーザーを撃つてアルター・ゾディアーツへ命中させる。

そして、巨大な腕を振るおうとした改造兵士レベル2へも同じように攻撃した。

直後、腕が吹き飛ぶ。

「あっ！」

ファイズⅡ音無の仮面にべちゃりと返り血がこびりついた。

まただ・・・。

アーツの火炎を受け止めた。

「先生、大丈夫か!？」

「その声……如月……?」

「おう!仮面ライダーフォーゼだ。先生も仮面ライダーだったんだな」

「ちがつ!俺は」

否定しようとしたファイズにアルター・ゾディアーツの火炎攻撃が二人に襲い掛かった。

「うわっ!こんのお……てめえにはこれだ!」

20番のスイッチを入れかえる。

『ファイヤー・オン』

フォーゼファイヤーステイツにステイツチェンジして、ヒーハックガンを構えず、攻撃を受け止める体制に入る。

アルター・ゾディアーツは火炎弾を連続で放っていく。

しかし、ファイヤーステイツは炎の攻撃を受け止めて力に変えるという特殊な力があり、徐々にスイッチにエネルギーがたまる。

「よっしゃあ!これでもくらえ!」

『ファイヤー』

『リミットブレイク!』

ヒールハックガンにファイヤースイッチを差込み、射撃体勢に入る。
銃口にエネルギーが集まっていく。

「ライダー爆熱シュート!」

アルター・ゾディアーツに当たるはずだった攻撃をファイズが割り込んで受け止めた。

攻撃を受けたファイズは地面に倒れ込む。

「先生!?!なんで邪魔するんだ!」

「お前は人を殺す気か!?!」

「はっ?いや・・・殺すつもりは」

フォーゼとしてはリミットブレイクで人間へと戻してスイッチを切るといういつもの流れなのだが、ファイズからすれば、先刻の出来事が蘇り。人を殺そうとしているように見えた。

その隙を逃す敵ではない。

改造兵士レベル2の腕が左右に展開されてバズーカらしきものが出現した。

そして、砲口がフォーゼへと向けられる。

「だから、俺は殺すつもりなんて!」

「やめろお!」

フォーゼを押しつけて手を大きく広げるファイズ。

直後、砲弾がファイズを撃ち抜く。

「がああああああああああああああああああああ！」

アーマーを貫く事はなかったがファイズは後ろに吹き飛び川の中へと落ちてしまう。

「せ、先生い!?!」

フォーゼがファイズへ視線を向けている間にアルター・ゾディアーツが襲い掛かる。

苦・悩・再・来（後書き）

フォーゼの時期は・・・そうですね、校長登場してから少し経過したくらい？

おそらくMOVIE大戦も行なった後なんじゃないかなあ？

次回の話が終わりましたらコラボを執筆します。

上手く書けるかすっごい自信ないですけど、

それでは赤・白・共・闘でおあいしましょう。

赤・白・共・闘

「やべっ！」

アルター・ゾディアーツが上から杖を振り下ろそうとした所を横から黄色いロボットが乱入して投げ飛ばす。

「隼！」

「いくぞおおお！」

サポートメカ、パワーダイザーに改造兵士レベル2は手の砲弾を放つ。

ズガガガッ！と火花を散らして後ろに仰け反るが、大きなダメージはないようだ。

「弦太郎！無事か？」

「おお！助かったぜ」

大文字隼が操るパワーダイザーの介入により、戦況が悪いと判断したのか改造兵士レベル2はずんずんと下がっていく。

「おめえは逃がさないぜ！」

ベースステイツへと戻ったフォーゼはロケットとドリルをマテリア

ライズしてリミットブレイクの体制に入る。

『ロケット・オン』

『ドリル・オン』

『リミットブレイク』

「ライダーロケットドリルキック！」

逃げようとしていたアルター・ゾディアーツに必殺技が炸裂した。

「って……なんだこりゃ!？」

爆発して落下したスイッチをキャッチしてスイッチを切ったのだが、そこに倒れていたのはどういうわけか人間ではなく。人間の形をしたロボットだった。

「って、そうだった!先生い!」

変身を解除した弦太郎は川に落ちた音無を探そうと叫ぶ。

目の前にファイズがいる。

「どうしてあんたは俺にこれを託したんだ!」

音無はファイズに訴えた。

どうして、自分にベルトを託したのか。

どうして、あんな化け物と平気で戦っていたのか。

どうして、自分はこんな目にあわないといけないのだろうか？と。様々なことを訴える。

しかし、ファイズは答えずただ前へ前へと進み続けていた。

「待てよ！おい！」

ファイズを追いかけてようとしていた音無がいつの間にかファイズになっでいて、しかもその手が血まみれになっているのを見て。音無は。

「うわあああああ！」

悲鳴を上げて起き上がった。

「あ、目が覚めた？」

「ハア・・・はあ・・・ここ・・・は？」

意識を取り戻した音無が周りを見ると河原のすぐ近くにあるダンボールで造られたもののなかだった。

そこにはボロボロのマフラーを纏った女の子が覗き込んでいる。

「あんたが・・・俺をここに運んでくれたのか？」

「そーだよ、いやあまさか桃もたいにどんぶらこどんぶらこおと人が流れてくるなんて思わなかったよ」

「ありがとう・・・助かった」

「困った時はお互い様だよ。あ、私の名前はサミということで」

「サミ？」

「そう！ところでチミの名前は？」

「音無結弦……」

「ふうん。音無君か。怪我が治るまで少し休むといいよ」

「……ああ……すまない」

そういつてサミという少女は外へ出て行く。

音無は後ろにもたれるようにして倒れ込む。

自分は……何をしているのだろうか。と。

「それにしてもまさか、アルター・ゾディアーツが再び現れるとは驚いた」

「それにあの人型の怪人もだ。明らかにゾディアーツじゃない」

「そういえば、弦太郎は？」

美羽がきよろきよろと一番うるさい？であろう人物を探す。

「ああ、それならバガミール持って、ライダーを探すんだーとかいつて出て行きました。なんでも他のライダーに遭遇したとか」

「ライダーか・・・」

「そういえば、前にもメダルを使って変身する仮面ライダーにあつたよね」

ユウキのいう仮面ライダーという存在についてはいまは置いておいて。

賢吾はアストロスイッチカバンに映っている改造兵士レベル2を見て思っていた。

もしかしたら何かとんでもないヤツが絡んでいるのではないかと。

実際の所賢吾の予想は的中していた。

しかし、彼らがその敵とぶつかるといふ物語はない。

「まったく・・・見つけたと思ったら変な所に隠れやがって・・・さて、どうやってあぶりだすかなあーんてことはもう決まってるから。さっさと潰して来い」

男は傍にいた改造兵士レベル2に指示を飛ばす。

そして、傍にはもう一体のゾディアーツがいた。

直後、砲弾が飛んできて音無は外に転がり出る。

そこにはバズーカ砲のような手を構えている改造兵士レベル2が立っていた。

戦う、そんな考えはない音無は逃げる体制に入ろうと考えていたがサミの姿がないことに焦っている。

さっきの爆発で怪我をして動けないのだろうか？

そう思っていたら改造兵士レベル2をなぎ倒して銀色のバイクに乗ってサミが現れた。

「音無君！逃げるよ」

「え．．．ちよっ！」

何かを言う前にサミは音無をバイクの後ろに乗せて走り出す。
誰もいない工場の中にバイクを止めて音無とサミの二人は降りた。

「ふう．．．音無君。大丈夫？」

「あ．．．はい」

「そう．．．にしてもごめんね」

「なにがですか？」

「巻き込んだじゃって」

「あれはサミさんのせいじゃ」

「さっきのじゃなくて．．．．．“これ”のことだよ」

「っ．．．．．これ」

「君が川から流れてきた時に掴んで放さなかったものだよ」

サミが見せたのは音無が持っていたファイズのベルト。

それをみて動揺している音無にサミは語る。

「君がこれを持っているという事はあいつは死んだってことだよね」

「あなたは……知っているんですか？あの人のことを」

「うん。知り合いだった。そして一方通行の恋してた」

「………あ」

音無が何か言おうとした所で壁を壊して改造兵士レベル2が現れる。

「音無君、私ね。実は化け物なんだ」

サミの言葉の意味を音無が問おうとした所で彼女の体が灰色に“変身”した。

顔に何かの生き物のような姿が浮き上がり全身を灰色の怪物へと姿を変える。

カニを模した怪人。クラブオルフェノクは近づいてきた改造兵士レベル2の体に拳を叩き込む。

拳は厚い胸板を一撃で貫通した。

体を貫かれた改造兵士レベル2はそのままドシンと後ろに倒れ込んで動かなくなる。

クラブオルフェノクから人間の姿に戻ったサミを見て音無は何もいう事ができない。

いや、何を言えばいいのか思いつかなかったというのが正しいんだ。

「……あまり驚いていないみたいだね」

「なんというか……医療に従事している人間なんで不意打ちみ

たいなことに耐性がついているのかもしれませんが」

「そっか……。それで音無君に聞きたいことがあるんだけどいい？」

「なんです？」

「そのベルトを継ぐ意思と覚悟はある？」

「っ！」

サミの言葉に体が震える。

ベルトを渡された時、継ぐ意思はあった。

けれど、覚悟は？ちゃんとあったといえるのだろうか？

答えはNo。あるわけがない。

その事を言おうとすると口が震えて何も言えなかった。

「まっ、彼の事だから何もいわずに渡したんだろうけど」

「先生い！」

サミの声を遮るほどのかい声を出して如月弦太郎が走ってくる。ずっと走り回っていたのか彼の顔は汗が沢山流れていた。

「よかった……。無事だったんだな！」

「如月君……」

「んだよ。雑魚が集まってお楽しみ中かい？」

「お前……」

「よお、また会えたな屑」

工場に入ってきたのは先日、雄太君や奏を誘拐したアジトで王座のような椅子に座っていた男だった。

そして、後ろには財団Xへ差し出されたスイッチによって変身したゾディアーツの姿がある。

先ほど倒されたアルター・ゾディアーツ、ピクシス・ゾディアーツ、ユニコーン・ゾディアーツ。

「さてさて、最後の通告だ。大人しくファイズのベルトを渡せ、それが目の前でベルトを破壊しろ」

「……」

「そんなことさせないよ」

音無と弦太郎を庇うようにしてサミが前に出た。

サミはオルフェノクへ変身する。

「うおっ!？」

弦太郎は驚いた。

その表情に恐怖などなくただ単に驚いただけのようで、音無はそれに驚くしかなかった。

ん？と男はクラブオルフェノクを見て口元をゆがめる。

「へえ」。成長していて気づかなかったけど。お前昔逃げ出した実験体か」

「実験……体？」

「そうだぜ？こいつはただのモルモット」

「私は人間だ！」

クラブオルフェノクは叫んで走り出す。

男はさらに口元をゆがめる。

「これだからバカは挑発すると楽しいんだよなあ。こつも思い通りになってくれんだからよ」

指を鳴らしてピクシス、ユニコーンがクラブオルフェノクに襲い掛かる。

クラブオルフェノクは攻撃を受け止めて反撃しようとするが遠距離のアルターの火炎攻撃を受けて後ろに仰け反った。

その隙を逃さずアルターとユニコーンがクラブオルフェノクを拘束する。

「さて、中々面白いものを見つけたからには利用させてもらわないとなあ」

『PUPPETEER』

懐からメモリを起動させて体の中に差し込む。

パペティアードーパントに変身して、手の先から糸のようなものを

弦太郎の怒鳴り声に辺りが静まり返る。

「感傷的になって何が悪い！戦うのを怖がって何が悪い！この人は誰よりも相手を傷つけるのが嫌なんだよ！」

「如月……」

「それにある人がいつていた仮面ライダーは助け合いだつてな！俺は全ての仮面ライダーとダチになる！ダチが震えて動けないなら支えて一緒に前へ進んでやる！戦うのが怖いってんなら俺が変わりに戦つてやる！」

「なんだよ……てめえ」

「俺は如月弦太郎。全てのライダーとダチになる男だ！」

フォーゼドライバーを装着して変身体制に入る。

『3』

『2』

『1』

「変身！」

白い煙を切り裂くようにして仮面ライダーフォーゼが現れた。

どうして、ここまでこいつはバカ正直に進んでいけるのだろうか？

音無は隣で仮面ライダーに変身した如月を見る。

何も考えていない？

いや、違う。

彼は自分の信念を曲げないために戦っているんだ。

なら……。

「宇宙キターーーーーー！」

「バカか……やれ」

襲い掛かってくるピクシスとユニコーン。

「仮面ライダーフォーゼ。タイマン……うおっ!？」

襲い掛かってきた二体の攻撃を避ける。

「おい！タイマンっていつてんだろ!？」

「雑魚のことなんか誰がきくかよ。ほら、お前もいつてこい」

パペティアードパントに操られてクラブオルフェノクも襲い掛かった。

「うおっ！操られているのか!？どうすりゃ」

「うおおおおおおお!」

横から音無がクラブオルフェノクにタツクルをする。不意打ちを受けて地面に倒れる。

「俺は……」

「先生？」

「あん？」

「誰かを傷つける、命を奪う事を恐れてただ閉じこもっていた。でも……そんなことをしていても何かが解決するわけじゃない。戦うしかないんだ。こんなことをする奴らを止めるためには……」

腰にベルトを巻いて音無は真剣な表情のままファイズフォンを開いてコード555を入力してEnterキーを押す。

「戦う事が罪なら俺はそれを背負いながら戦い続ける！変身！」

『Standing By』

『Complete』

赤い光を放ち、音無はファイズに変身する。
覚悟は出来た。

「さあ、ノンストップで行くぜ！」

「仮面ライダーフォーゼ。タイマンはらせてもらっぜ！」

ファイズはフォーゼに攻撃を仕掛けようとしていたアルター・ゾディアーツにフォンブラスターを放つ。

攻撃を受けて地面に倒れ込むアルター・ゾディアーツ。

「先生！」

「如月・・・ありがとう。キミのおかげで覚悟が出来た」

そういつて音無は如月へ手を出す。

「おう！俺とあんたはダチだぜ！」

フォーゼとファイズは互いに握手をして拳をたたきあう。
如月流の友達の証。

それを終えて二人は敵を見る。

「サミさんは操られているだけだ。彼女を足止めして残りを倒すぞ」

「おう！」

『レディーの相手なら俺が勤めよう』

突如、パワーダイザーが飛んできてクラブオルフェノクを押さえつける。

「隼！ナイス！」

「彼もキミのダチか？」

「そうだぜ！心強い仮面ライダー部の仲間だ！」

電話の着信音みたいなものがフォーゼから鳴り出す。

『レーダー・オン』

『如月、無事か？』

「賢吾か。無事だぜ」

『状況は把握している、エレキと23番のスイッチを使え』

「おっしゃー！」

『エレキ』

『ウォーター・オン』

フォーゼはエレキステイツヘステイツチェンジしてビリーザロッドを構えて、左足にウォーターモジュールを展開した。

「姿を変えたのか、なら俺もそうするか」

ファイズは左腕に装着されているリストウォッチにセットされているアクセルメモリーをプラットフォームに差し込む。

『Complete』

胸部のアーマー、フルメタルラングが開いて両肩に装着され、黄色い複眼が赤く変色し、体の回りのフォトンブラッドが銀色へチェンジする。

「数秒で蹴散らしてやる」

フォーゼがウォーターモジュールで敵を翻弄している間にファイズはリストウォッチのスイッチを押して高速モードに入った。

『Start・Up』

『ExceedCharge』

次々と赤いターゲットマークがピクシス、ユニコーン、アルターへ必殺技『アクセルクリムゾンスマッシュ』を放つ。

高速の攻撃をよける事ができずゾディーアーツは爆発した。

「うつわぁ・・・すっげえ」

フォーゼエレキステイツは驚きの声をあげる。

「残るはてめえだけだ」

「はん、まあいい。俺一人でもてめえらとは戦えるからな。こんな感じでなあ！」

パペティアードパントは手にクラリネットを取り出して二人へ攻撃する。

しかし、相手が不意打ちを行なう事を予測できていた二人は同時に動き出す。

フォーゼはビリーザーロッドにエレキスイッチをセットしてレバーを押してリミットブレイク体制に入る。

ファイズも空中でミッシェンメモリーをファイズポインターにセッ

トして右足の側面にポインターをセットしてファイズフォンのEnterキーを押す。

『エレキ』

『リミットブレイク!』

『Ready』

『ExceedCharge』

「ライダー百億ボルトブレイイイク!」

「クリムゾンスマッシュ!」

「なっ……ぐおおおおおおおおおおおおお!」

ダブルライダーの必殺技を受けてパペティアードーパントは爆発した。

「はふ〜。酷い目にあつたあ〜」

「サミさん。無事でよかった」

「でも、まさかあんな風に覚悟決めるなんて思わなかったよ〜」

「いえ・・・」

サミは突如、真顔になって音無に話し始める。

「覚悟したなら教えるけれど。“奴ら”はキミのベルトを破壊するために刺客を送り込むかもしれないから用心してね」

「“奴ら”・・・？」

「奴らの目的は知らないけれど。“奴ら”一人一人が地球の記憶を内包した特殊な力。ガイアメモリのTypeZero。TOMEMORIを使用して悪事を行なう。でも、それが表沙汰になる事はないの。何故ならこの国の警察機関の奥底にまで影響力を与える事ができる力を持ち、様々な事件の裏に“奴ら”の姿がある。はっきりいって規模は底知れないけれど」

「戦いますよ」

音無は先ほどまでの苦悩している表情とは違う。悩みを振り切った表情をして答える。

「俺は仮面ライダーです。人を助けるためなら相手がどれだけ深くても戦います。挫折しそうになっても支えてくれるダチがいますか

らね」

「おう！」

ばしっ！と互いの腕をぶつけあう音無と弦太郎。

「そう・・・なら、私は行くね。ありがとう、仮面ライダー」

それだけいってサミは姿を消す。

「くそっ・・・あの雑魚があ・・・」

路地裏で荒い息をしながらPのメモリを握り締めて男は悪態をはいている。

ダブルライダーの攻撃を受けた際に辛うじて致命傷を避けた。けれど、体に受けたダメージは結構大きい。

「だが・・・俺にはまだこのメモリがある・・・くっくっ・・・必ず復讐して」

「その必要はない」

「なっ・・・！」

背後から声が聞こえたと共に、男の体から手が現れた。目を見開いた男の口からゴボリと大量の血が零れ落ちる。

「てめっ・・・何を・・・」

「“あのお方”からの命令だ。敗者であるお前は用済み。ここで消滅しろということだ」

「なっ！メモリを破壊するというのか！」

「メモリは既に壊れている。お前の敗北と共に」

掌に光弾を出現させて男の顔に押し付ける。

男は憎悪で顔を染めつつ、何もいえることなく消滅した。

そして、男の手の中にあったPのメモリは地面に落ちると粉々に砕け散る。

「全く。清人君といい。彼といい．．．どうして私だけおいて先にいっちゃうんだろうなあ．．．」

サミはぽつりと呟く。

そんな彼女の脳裏には『三人』で過ごした懐かしく、取り戻すことの出来ない日々が蘇っている。

「さて、あの人が自分の意志を託したんだ。私も誰かに託さないとね・・・これを」

SMART BRAINのロゴが入ったアタッシュケースを手を持ち、サミは闇の中へと消えていく。

赤・白・共・闘（後書き）

さて、次回からコラボにはいります。

異世界からの来訪者＋喧嘩（前書き）

今回からけいおん！～例えば、俺が全てを忘れても～の中都藤馬君
たちが登場します。

この話を見る前に読んでみる事をおススメします。
そのほうが面白いので～。

異世界からの来訪者＋喧嘩

「ああゝゝゝ。やつべえなあ．．．ほんとやべえよ」

とある世界の管理者、通称クソ神w。

「ちげえよ！？てか、wってなんだよ！wって！酷くないか！？」

放って置いて。

「放って置かないでゝゝゝ」

数分後。

「はあ．．．どうせこんな扱いだよね。俺。いいよ、せつかくのコラボなんだし俺なんてこんな扱いでいいよ。

というわけでコラボスタート。

どうも、私こと中都藤馬は病院を抜け出して怪人を倒すためにやってきたのですが。

少し様子がおかしいのです。

「なんだ．．．ありや？」

現れた敵を見て藤馬はぼかんとした表情をしていた。

襲われそうになっていた人を助けて目の前の敵を見ていたのだが。全身が灰色。それだけならオルフェノクと判断できるのだが、今まで遭遇したオルフェノクとどこか違う。

体はムキムキな筋肉体系で顔や肉体がゴツゴツとしていて、片腕は異形としかいいようがないくらい不気味な形をしている。

え、灰色だけでオルフェノクと判断してないかって？

ＨＡＨＡＨＡそんなわけにやゝだろ！

「ふざけている場合か！」

ごもつともです。

「行くぜ！コウモリもどき！」

「ガブリ！」

片手にしている包帯を外す。すると隠されている“キバの紋章”が現れた。

キバツトバツト？世が藤馬の手に噛み付く事で体内に魔皇力が流れ込み表情を険しくする。

顔にステンドグラスのような模様が現れ、腰には紅黒いベルトが巻かれた。

キバツトを持っている右手を前に出し。

「《変身！》」

中都藤馬は異形へと姿を変える。

全体のカラーは紅にヴァンパイアのような外見。頭部はコウモリのような装飾、黄色の複眼、手足には鎖状の拘束具カテナと呼ばれるものが巻きついている。

幾度となくファンガイアと戦い、様々な壁にぶつかりながらも人を、

仲間を守るために乗り越え、強くなってきた仮面の戦士。
名前をキバ。

仮面ライダーキバ。

「《絶滅タイムだ。ありがたく思え》」

キバはキックを目の前の異形・改造兵士レベル2へと放つ。

改造兵士レベル2はキバのキックを片腕で受け止める。だが、キックの威力が強すぎて右手がペシヨリと潰れてしまう。

「強いのかと思ったらあまり強くない？」

「油断は禁物だぞ」

「わあってるって！」

そついいつつ改造兵士レベル2に攻撃を仕掛けようとした所で異変が起きる。

「なんだ!？」

「銀色の壁？」

キバと改造兵士レベル2の前に二つの銀色のオーロラのような壁が現れて二人を飲み込む。

「さて、これでいい」

消えたオーロラを眺めてボロボロの白衣を纏った人物がにやりと微

笑んだ。

「これで奴らの計画も少しくらい狂ってくれるだろう」

海鳴市にある喫茶翠屋。

そこで働いている立華奏はぼーとした表情で立っている。

「かなでちゃん」

「何ですか？美由紀さん」

この店の店員で娘でもある高町美由紀が奏に抱きついてきた。
奏は嫌がる様子も見せず尋ねる。

「意中の人は来たの？」

「・・・まだです」

顔を赤くして否定することなく答える。

その言葉に店内に居た男性達は顔をしかめた。

実はこの店の客のほとんどが奏のファンであり、彼女の好意を寄せ
ている相手〓嫉妬の対象となるのである。

「こんにちは」

「あ、音無君いらっしやい」

ブワッ！

室内の嫉妬パワーが増大するが当人は全く気にする様子なく中に入る。

「注文はどうする？結弦」

「いつものヤツで頼むよ。奏」

「わかった」

そういつていつものセット（コーヒーとサンドイッチ）を待つ音無。彼の前に美由紀が座る。

「なんですか？」

「奏ちゃんとはどこまでいったの？」

「どこもいつてませんよ。てか、ここで時間潰していいんですか？」

「いいのよ。もう、音無君秘密主義なんだから」

「なんのいつ」

~~~~~

その時、音無のポケットの中に入っている携帯電話が鳴り出す。  
なんだ？と思つて電話に出ると。

『音無か！？』

「小室さん？どうしまし」

『化け物がでやがった！すぐに海岸の方に来い！』

「わかりました！あ、奏！そのセット後で食べるから置いておいてくれ！」

「わかった。気をつけてね」

「おう！」

答えて音無は外に停車させてあるバイクに乗ってエンジンを入れて走り出す。

小室源介は不幸としかいえない状況にあつた。

佐伯風華という記者が追いかけている“ドッペルゲンガー”というものにもかしたらあの人間が黒焦げで死んだ事件がなにかわかるかもしれないと思つて調査していたのだが、全身がステンドグラスのようなものでできた怪物がいきなり「ライフエナジーをよこせえ」といつて襲い掛かってきたのである。

「逃がさん。多くのライフエナジーを手に入れることで同胞が蘇る」  
マンティスファンガイアは後ろに棺らしきものを持っていた。



小室は警官だが常に拳銃とかを持ち合わせているわけではないので戦うなんていうわけにはいかない。

マンティスファンガイアは速度を上げて小室に襲い掛かろうと手に持つ鎌を振り下ろす。

小室の速度では間に合わない。

やられる！と思ったとき、横から赤いバイクが乱入してマンティスファンガイアに体当たりをした。

「遅いぞお！音無」

「それでも急いだ方なんですから言わないでください」

ベルトを腰に巻いた音無が返す。

ファイズフォンを開いて変身コード『555』を入力してEnterキーを押す。

『Standing By』

「変身！」

『Complete』

赤い光に包まれて音無結弦は仮面の戦士へ変身する。

突然の出来事に戸惑いながらしっかりとした覚悟のないまま戦いの渦へと放り込まれつつも、出会った仲間により戦い抜くと決めた赤い閃光のライダー。

名をファイズ。

仮面ライダーファイズ。

「さあ、ノンストップで行く！」

ファイズは駆け出そうとすると目の前に銀色のオーロラが現れて攻撃が阻まれる。

「な、なんだこれは……」

戸惑っているとマンティスファンガイアは不敵な笑みを浮かべて姿を消していく。

入れ替わるようにして赤い拳がファイズに襲い掛かってきた。

「っ！」

突然の事に戸惑いながらも片手で払いのけながら目の前の敵を睨む。ヴァンパイアを模したような姿に体のいたるところに鎖を巻いた異形。

ファイズが科学的だとするなら目の前の存在は魔術的な存在。

「なんだ……お前！」

再び放たれた拳を掴んでファイズは叫ぶ。  
すると、相手が驚いたような声を漏らす。

「喋った！」

「……は？」

「お前何者なんだよ！」

「それはこっちのセリフだ。いきなり襲い掛かってきやがって！」

「襲い掛かってきたのはそっちだろ！」

目の前の敵、ファイズを蹴り飛ばしてキバは叫ぶ。

蹴られた部分を抑えながらもファイズはすぐに体制を整えてファイズフォンをフォンブラスターへと切り替えてキバへ向ける。

「わっ！？うおっ！」

飛んできたレーザーを回避しながらキバはベルトの側面に装着されている緑色のフェッスルをキバットに差し込む。

『バッシャーマグナム！』

軽快なメロディーが流れていつものようにバッシャーマグナムが飛んでくることがない。

「はっ！？どういうことだよトマトコウモリ！？」

「わ、わからん！もしかしたらここにキャッスルドランがないのかもしれない」

「いないって、そんなわけあるわけないだろ！」

「実際に来ないのだから仕方あるまい！」

ぎゃーぎゃーともめだす一人と一匹を見て攻撃していいのかしない方がいいのか悩むファイズ。

「おい……なんだ、あれは」

小室も近づいてファイズへ尋ねる。

「さあ？」

ちなみに一人と一匹の喧嘩は我慢が出来なくなり小室がゲンコツを振り下ろすまで続いた。

「最悪な展開だな」

ポケットにあるメモリで遊びながら少年は呟く。  
そして、片方の手には銀色のメダル・セルメダルがじゃらじゃらと音を立てている。

「別世界の仮面ライダーか……報告しないといけないし。力の判定もしないと……」

## 異世界からの来訪者＋喧嘩（後書き）

かるーい、キャラ説明。

中都藤馬

388859さんの作品の主人公。バカなことをしまくるけれど、場面ではしっかりと主人公として戦おうとする素晴らしいキャラ。表向きは明るく見えるが内では様々な葛藤をしてる。

数回転生しているらしいが記憶が欠如しているので詳しい事はわからない。

それでは次回でおあいしましょう。メリークリスマス！

## 現れる二人目（前書き）

タイトル考えるのに2日かかってしまった。

そして、コラボ二話目です。

## 現れる二人目

「本当にすいませんでした」

場所は喫茶翠屋。

そこで中都藤馬が音無結弦と小室源介へ頭を下げる。

彼と一緒に居たコウモリ、名前をキバツバツト？世というらしいのだが、彼の持ってきたバイオリンケースの中に隠れてもらっている。店の中で見つかったら大騒ぎになるのは目に見えているからだ。

「ところで、お前らさっきのは嘘じゃねえんだろうな？」

「小室さん・・・疑いすぎですよ。さっきも見たじゃないですか。あのオーロラ」

未だ藤馬を疑う小室に音無が言う。

あの後、喧嘩をしているキバに呆れてファイズが変身を解除して話し合おうということになった。

このとき、ようやくキバは敵じゃないという事に気づいて土下座モードに入ろうとした所で小室さんのゲンコツが炸裂する。

「けれど、何故中都君はこの世界に来たのだろうか？」

「恐らくだが」

ボソボソとバイオリンケースから声が聞こえる。

「この世界で起こっている事件がこっちに関与しているのではないだろうか？そして、それを解決しないといけないためにこのバカが呼ばれたのかもしれない」

「そう、その通り」

「って、誰だ！」

いつの間に現れたのか机の上に男が立っていた。

「あ？なんでてめえがここにいるんだ！？」

藤馬は机の上に現れた男に驚く。

そこにいたのは藤馬のいた世界の神様で。なんだかんだと藤馬に苦しい仕事を押し付けたりする嫌なヤツであるからだ。

クソ神は音無と小室の反応に喜んでいようだが、この状況を許せない人物が一人だけ居たのである。

ツカツカとクソ神に近づいて腕でクソ神の足を払って地面に落とす手に持つトレイを顔のすぐ横に突きつけた。

「ここは食事をする場所よ。子どもですら守れるマナーを守れないのならすぐに出て行ってください」

「・・・・・・・・はい」

「ザマアw」

聞こえないように藤馬は微笑み。  
音無達は場所を変えて外に出る。



「あん・・・ちつ。しゃねえなあ。くそっ！」

小室は悪態をついてケータイをポケットにしまう。

「どうしたんですか？」

「上から戻って来いという知らせだ。悪いが後は任せたぞ。坊主。何かあったらすぐ連絡しろよ」

「はい。小室さんも気をつけてください」

「おう」

「あの・・・小室って怖い人。刑事だったんすか？」

「言動とかは悪いけれど。いい人だよ。それであんたはなんで俺達の前に現われたんだ？」

「ようやく会話ができるよ・・・てか、さっきの女の子なんだよ！？怖すぎなんですけど」

こいつ、本当に神か？と疑いたくなつた音無。

「とにかく説明をしてくれ。どうして中都君がこの世界に来たんだ？」

「ああー、そのことなんだけだよ。どおも、この世界にお前の世界のファンガイアが入り込んだのが原因で急遽倒すために呼ばれたらしい」

「らしいって・・・おい、なんで曖昧なんだよ!？」

「だってー、事情を聞いてもこの世界の神教えてくれないんだよ」

「よほど、信用ないんだな」

「ですよね」

「まあ、解決したらすぐに帰れるから!てなわけでガンバ!」

それだけいって神様は姿を消した。

本当にわけがわからない。と音無と藤馬は同じことを考える。

余談だが、あのクソ神は大事な事を言い忘れていた。

「っ!藤馬!ファンガイアの気配だ!」

「どこだ!」

「やばい・・・さっきの店」

「中都!乗れ!」

「あ・・・はい!」

キバットの言葉に音無は停車させていたバイクに乗り後ろに乗れと藤馬に叫ぶ。

藤馬は驚きながらも後ろに飛び乗る。

音を立ててバイクは走り出す。

翠屋の中は騒ぎになっていた。

「美由紀さん！大丈夫ですか」

「私は・・・大丈夫・・・奏ちゃん。早く逃げ」

「危ない」

持っているトレーで奏はファンガイアの牙を弾き飛ばす。

周りにいた人達の何人かは店の外に避難できたのだけれど、二人ほどファンガイアにライフエナジーを吸い取られて奏の目の前でガラスが割れたみたいに消滅する。

奏は恐怖で体が支配されそうになっているが、ある物が必死に彼女を支え続けていてそれが折れない限り奏は止まる事はない。

「（来る・・・結弦はきつと来てくれる・・・）」

奏が折れない唯一の理由。それは愛しい人ともいえる音無結弦が必ず助けに来てくれる・・・と。

思いを知ってか知らずか、マンティスファンガイアはゆっくりと鎌を構えて奏に近づいてきた。

命を刈り取るために。

ゆっくりと振り上げられる鎌に奏は目をつぶろうとする。

しかし、声が響く。

「女の子に何しようとしているんだブレイイイク！」

バイクが壊れた窓ガラスから入ってきてマンティスファンガイアの背中にぶつかりそのまま店の外へと放り出す。

「大丈夫か！奏！」

「……結弦」

奏は弱々しく相手の名前を呼ぶ。

「無事みたいだな……美由紀さん！……よかった。気絶しているだけか。少し待て。安全な所につれていく」

「う……ん」

中都藤馬は店の惨劇の中に既に命を失った存在が何人かいることに気づく。

「また……助けられなかった」

幾度となく思った事。

あと少し。

あと少し早かったらこの人達は命を失う事がなかった、と。けれど、過去を振り返っても何かがあるわけではない。

助けられなかった人達より多くの人達を守る。

今の藤馬の決意。

そして、人を襲おうとする敵はすべて。

「コウモリ！」

「おう！ガブリ！」

キバットが手に噛み付いて体内に魔皇力が体内に流れ込む。

「変身！」

キバットを腹部のベルトに止めてキバへと変身する。

「《絶滅タイムだ。光栄に思え！》」

叫んでマンティスファンガイアへと殴りかかった。  
そのキバの戦いを離れた所で見ている存在がいる。  
全身を黒と銀のコードを纏い、顔はフードに隠れていて素顔、性別  
もわからない。

「やっぱり、邪魔だな。あれ」

ポケットから銀色のメダル・セルメダルを取り出して、半分に砕いて空に投げる。  
するとヤミーとは異なる屑ヤミーが現れた。

「あれ・・・」

マンティスファンガイアと戦っているキバを指差す。

「壊して来い」

合図と共に屑ヤミーが襲い掛かる。

「（藤馬！屑ヤミーだ！）」

「なっ！こんな時に！？」

マンティスファンガイアに決定打を与えられなかったキバに訪れる不利な情報。

先ほどから攻撃をしかけるとマンティスファンガイアの持つ鎌により攻撃のほとんどを弾かれてしまう。

こういう場合、ガルルセイバー・バツシャーマグナム・ドツガハンマーといった頼りになる仲間を召喚するという方法があるのだが、キャッスルドランがこの世界にいないから召還する事が出来ない。その状況の中で屑ヤミーの出現。

やばいなあ、とキバが思っていると市販のバイクが近づこうとしていた屑ヤミーをなぎ払う。

「音無さん！」

バイクのヘルメットを置いて音無はベルトを腰に巻いて、ファイズフォンを開く。

「許さない」

ファイズフォンに変身コード『555』を入力してEnterキーを押して、ファイズフォンを空へ掲げるように持ち叫ぶ。

『Standing By』

「変身！」

ベルトにファイズフォンを差し込むと同時に赤い光に包まれてファイズへと変身する。

『Complete』

「中都・・・」

近くにいた屑ヤミー達を殴り飛ばして、ファイズはキバの隣に立つ。

「音無さん。他の人達は？」

「安全な所に避難させた」

そういつてファイズとキバはマンティスファンガイアへと殴りかかる。

今までは一人相手に余裕の態度だったマンティスファンガイアだったがライダーが二人になった事により攻撃が多くなり鎌でさばく事が難しくなっていく。  
そして。

「「これでもくらええ！」」

「ぐおおおおおおおおおおおおお！」

怒りの籠った一撃を受けてマンティスファンガイアの鎌は壊れて攻撃を受けた本人は地面に大きく叩きつけられる。

「ぐっ・・・くっ・・・仕方あるまい」

マンティスファンガイアは大きく距離を置いて地面に手をかざす。  
すると何かの陣らしきものが展開されてそこから二つの棺が現れる。

「棺・・・？」

「なんだそりゃ？」

「藤馬。警戒しろ。あの棺おぞましい気配がする」

キバットの言葉に身構える二人に対してマンティスファンガイアは不適に笑いながら棺の蓋を開く。

開いた箇所から瘴気らしきものが噴き出し、衝撃が二人を襲う。

「なっ！」

「こいつら倒したはずじゃ！」

棺の中から現れたのは嘗てキバが倒したホースファンガイアと先代ファイズが倒したアクセルドーパントが現れた。

敵の増援に戸惑っているとアクセルドーパントがバイクに変形してキバとファイズに攻撃を仕掛ける。

「ぐおっ！」

「あっ！」

攻撃を避けられることが出来ず二人は地面に叩きつけられた。

さらに追い討ちをかけるようにして屑ヤミーがキバとファイズを囲むようにして攻撃を始める。

「くそっ……このままやられてたまるか！」

『Complete』

『Start・Up』



ファイズはプラットフォームにアクセルメモリーをセットして、アクセルフォームにチェンジしてアクセルウォッチのスイッチを押して高速モードとなり、アクセルクリムゾンスマッシュで屑ヤミー達の半分以上を蹴散らす。

「うおおおおおおおおおおお！」

キバも複眼が黄色から紫へ変化して地面の中に手を入れてそこからメダガブリューを取り出し、回転するようにして次々と屑ヤミーを破壊した。

「なにっ!?!」

マンティスファンガイアが突然の事に戸惑う。

守るように立っているファンガイアとドーパントも二人の気迫で後ろに下がっている。

このまま敵を倒そうと駆け出そうとしたファイズとキバに斬撃が襲い掛かった。

「ぐあっ!」

「うああっ!」

『Time・Out』

攻撃を受けてファイズはアクセルフォームからノーマルフォームに戻され、キバは複眼が黄色に戻り、メダガブリューも手から零れ落ちる。

「……………ひゃっ」

ファンガイアたちの前に現れたのは中世の甲冑のようなものを纏った怪人だった。

片手はカニのようなハサミをしている。

「なんだ・・・こいつ」

「全身鎧・・・？」

「気をつける。こいつは後ろの三人とは比較できないほどに強いぞ」

「消えろ」

キバットからの警告で二人は起き上がろうとするが再び鎧の怪人からの攻撃を受けて

二人は壁に叩きつけられ、変身が強制解除される。

「くぼっ！」

「がはっ！」

二人とも傷だらけになり動く事も難しい。

「・・・・・・・・・・」

「やれ」

マンティスファンガイアの命令と共にホースファンガイアとアクセルドーパントが駆け出す。

絶体絶命かと思われたその時。

**ブオオオオオオオオオオオオオオオオン！**

突如、一台のバイクがアクセルとホースの一体の怪人をなぎ払うようにして停車する。

「なん  
・  
・  
・  
・  
・  
だ？」

「うっ……中都、動けるか」

音無は支えるようにして藤馬を助け起こす。

「あつね。こんな所で会うなんて偶然つてすげえなあ」

「お、お前……日向!?」

サイドカーが付いたバイクに乗っていたのは音無の知り合いの日向秀樹である。

日向秀樹はいつもの笑みを浮かべながらサイドカーの中に置かれているアタッシューケースから音無の使っているベルトと同様のものを取り出して腰に巻いて。ファイズフォンとよく似た携帯電話・カイザフォンに変身コード「913」を入力してEnterキーを押す。

## Standing By

「变身！」

Complete

二重の黄色いフォトンブラットに包まれ額にXのを模し、紫の複眼の仮面をつけた戦士。

カイザへと変身する。

「さあて、プレイボールってな！」

カイザは近くにいたアクセルドーパントへ一気に間合いを詰めて連続パンチを叩き込む。

攻撃を受けて仰け反るドーパントにカイザは左腰に装着されているカイザショットを外してカイザフォンのミッションメモリーを差込み、Enterキーを押す。

『Ready』

『ExceedCharge』

「どっせい！」

カイザの必殺技・グランインパクトを叩き込まれてアクセルドーパントは灰となって消滅した。

ホースオルフェノクは手に剣を出現させて振り下ろそうとする。

『Ready』

振り下ろされる直前にミッションメモリーを右腰に装着されているカイザブレイガンへ差し込んでカイザブレイガンで受け止めた。

『SingleMode』

片方の手でカイザフォンを取り出してフォンプラスターに切り替えてホースファンガイアの顔にこれでもかと光弾を叩き込む。攻撃を受けて仰け反るホースファンガイア。

「まだやるか？」

マンティスファンガイアと鎧怪人へ尋ねる。

「・・・めんど、引き上げる」

それだけいって鎧怪人は姿を消してマンティスファンガイアとホー  
スファンガイアも姿を消す。

「日向・・・お前・・・」

「とりあえず手当てしようぜ？」

何かを言おうとした音無を遮って日向は笑う。

## 現れる二人目（後書き）

次回でコラボが終わるのですが・・・やぶあい。勝手なことしているかもしれないとかなりビクビクしております。

年末までにはコラボは終わります。可能なら明日か明後日に投稿する・・・かも。

**最強フォーム！（前書き）**

タイトルの通りライダー乱舞です。

これにてコラボ終了です！

## 最強フォーム！

「カイザ出現・・・様子みるか」

武者鎧怪人の姿をしていた黒銀のコートを着た人物はぼそりと呟いて懷から数枚のセルメダルを取り出す。

「様子見・・・行け」

半分に壊したセルメダルを投げ飛ばして大量の屑やミミを生産する。

「それほどまでに警戒する必要があるのか？」

「・・・何用？」

黒銀コート的人物の前に現れたのは同じコートを着た男性だった。フードで顔を隠しているのに対して目の前にいる人物はフードがない。

「私の仕事がなんなのか知っているだろう？監視だ」

「・・・」

「別にキミの監視というわけではない。私は組織の人間が“余計な動き”をしないかの監視だ。それともう一つの命令のためにこの世界にきた」



「なに・・・？」

「“仮面ライダー”と名乗る奴らが我々の計画を次々と叩き潰している。計画にも支障ができていて、実験中だった融合騎も持ち去られた」

「あれ・・・じゃないの？」

あれ、とはファイズ・キバ、そしてカイザのことだろう。  
だが、男は違うと一蹴する。

「あれは仮面ライダーと同等の存在だがそう名乗っているとは言いがたい。何よりあのベルトは脅威ではあるがこちらが負けるという事はまずありえない」

言葉を区切り告げる。

「我らが主は一度ファイズを倒している」

「日向・・・いつつ・・・どうやってそのベルトを手に入れたんだ？」

「んゝ。ああ、もらったんだよ。ハミさんとかいう人から。そんで戦って・・・倒した」

日向の言葉に含まれている意味を音無は瞬時に理解してしまって、  
そうか、とだけ答える。

「それよりさ。俺も質問なんだけど。あの坊主はなんだよ？俺達の使っているベルトとは違うみたいだし。何よりコウモリが喋っているなんてありえねえ！」

「驚く所そこかよ・・・」

音無は呆れてしまう。

その頃、中都藤馬とキバツトバツト？世は日向秀樹と一緒に居たもう一人の人物と話し込んでいる。

「んで、なんでタツちゃんさんはあの人と一緒におられたのですかなあ？」

「トウマの言うとおりだな。いつこの世界に？」

「いえ、今朝方病院内を散歩していたらあの神サマが現われて何も言わずにこの世界に飛ばされてしまいました。困っていた所を偶然、この町へ戻ろうとしていた日向さんと会ったわけですよ」

「どうやら、この件にあの野郎は関わっていて言わなかったみたいだな」

このとき、藤馬とキバツトの二人は神を殴り飛ばす事を決意した。

『藤馬！』

その時、藤馬の脳裏に映司の声が響く。

火野映司、またの名をギルといい。藤馬の体内に埋め込まれている紫のコアメダルと関係あるらしいが詳しい事はわからない。

『屑ヤミーだ！困まっている！』

映司の言葉と同時に診療所の壁やドアを壊して大量の屑ヤミーが雪

崩れ込んでくる。

「音無さん！」

診察室に居る音無の所に駆け込もうとするが大量の屑ヤミーに阻まれる。というか押さえ込まれる。

「この！」

「トウマさんから離れなさい！」

タツロットとキバットが屑ヤミーに攻撃するが大したダメージがな  
いらしく、普通に動いている。

診察室内でも同じ状況で音無と日向はベルトを掴んだはいいいけれど、  
変身する暇もなく押さえつけられてしまう。

どちらもやばい状況の中でこいつらは現れた。

「お兄ちゃん、やっと見つけたよ！」

「ラモン！？次狼！？」

「おれ・も・い・る」

「力も！？」

現れたのはキャッスルドランの中にいるか外をうろついたりしてい  
る藤馬の頼りになる仲間達だった。

三人はそれぞれが青・緑・紫のオーラのようなものを放ちながらそ  
れぞれが怪人の姿に変化して屑ヤミー達を倒していく。

次狼は狼のような俊敏さを狭い空間の中で生かしつつ屑ヤミーをな

ぎ払う。

力は最強といわれるくらいの腕力で次々と屑ヤミーを地面に叩きつけてそのまま埋める。

「どうやってここにきたんだよ!？」

「それがさあ、変なゲートが開いて僕達それに巻き込まれちゃってさ!そしたらお兄ちゃん達が騒いでいるのを見つけたからやってきたの!フウ!」

状況説明をしつつ屑ヤミーを倒していくといつとんでもないことをやっているラモン。本当にすごすぎるよこの子!?!と思ってしまう藤馬君でした。

ちなみに、音無はこの修理後でやってくれんだろうな!?!と叫んでいた。

「トウマ!ファンガイアの気配だ」

『それとあの武者鎧怪人の気配もする』

キバット、映司の言葉に藤馬は頷いて音無達と一緒に外に出る。しかし、一つ問題があった。

「俺のバイクが!」

音無のバイクが屑ヤミー達によって破壊されていた。

「このままじゃ・・・」

「なあ、音無。お前ファイズ専用のバイクは？」

「専用バイク？」

「カイザにこのサイドバッシャーがあるように、ファイズにも専用バイクあるって聞いたぞ？」

「えっと……」

マンティスファンガイアはホースファンガイアを操り多くのライフエナジーを奪うために人が多い公園に来ていた。

「さあ……ライフエナジーを奪って来い」

ホースファンガイアには知能がない、ただ、マンティスファンガイアの命令を聞いたただの道化でしかない。  
故に行動に意味もない。  
だから。

「てめえらが何をしようかというのは一目瞭然なんだぜキックウウ

「ウウウウウウ！」

「いや、バイクでの体当たりだろ！？」

運転している日向が突っ込み。藤馬はサイドカーから飛び降りる。

「諦める・・・中都是こういうヤツだ。出会って数時間足らずだけで理解してしまった」

「申し訳ない」

音無の肩に止まってキバットバット？世が謝罪した。

「そんじゃ、行こうぜ！中都！音無！」

「今度こそ倒してやるぜ！」

「行くぞ！」

日向と音無の二人はベルトを装着し、藤馬はキバットを手に噛み付かせる。

変身コード『913』『555』を入力してEnterキーを押し。キバットに噛み付かれて魔皇力が体内に流れ込む。

『Standing By』

「変身！」

『Complete』

「《絶滅タイムだ！ありがたく思え》」

「さあ、ノンストップで行くぜ！」

「プレイボールつてな！」

それぞれの決意を込めてファイズ、カイザ、キバは構える。  
いたるところから屑ヤミーの大群が現れた。

「行くぞ！」

「おう！」

『ガルルセイバー！』

キバはガルルセイバーを召喚する。すると複眼が青に変化し、片腕にが青くごつごつした物へと変化。ガルルフォームにチェンジして近づいてくる屑ヤミーを切り伏せていく。

『Ready』

カイザはカイザブレイガンにミッションメモリーをセットしてカイザブレイガン・ガンモードで屑ヤミーを攻撃してホースファンガイアに切りかかる。

「うおおおおおおおおお！」

『Burst Mode』

ファイズはフォンブラスターに切り替えて近づいてくる屑ヤミーを



撃ち落す。

そんなファイズにキバが遭遇した改造兵士レベル2が襲い掛かってきた。

「くっ！」

横薙ぎに振るわれる腕を避けてフェイスフォンを差し込み、フェイスショットにミッシェンメモリーを差し込む。

Ready

「コレでも食らえ！」

改造兵士レベル2の腹に必殺技のグランインパクトを叩き込む。  
攻撃を受けた改造兵士レベル2は、のマークを残して灰となって消滅した。

近づこうとしてくる屑ヤミを蹴散らす。

Exceed Charge

[illegible]

カイザブレイガンの必殺技“カイザスラッシュ”が屑やミィ数体とホースファンガイアを蹴散らした。

「ドッガハンマー！」

キバはガルルフォームから一番のパワーを持つドツガフォームへとフォームチェンジしてドツガハンマーでほとんどの屑ヤミーを投げ

飛ばすようにして攻撃している。

「決めるぞ！」

『ドツガバイト！』

ドツガフォームの必殺技“ドツガ・サンダースラップ”により次々と屑ヤミーが吹き飛ばす。

「残るはてめえだけだぜ！」

カイザはカイザブレイガンをブレイドモードにしてマンティスファ  
ンガイアへと切りかかった。

「うおっ！？」

しかし、横から割り込む形で武者鎧怪人が現れて手のハサミでカイ  
ザブレイガンを受け止めて片方の手でカイザを蹴り飛ばす。

「援護感謝する」

「やれ」

感謝するマンティスファンガイアに対して一言いって、武者鎧怪人  
はカイザに襲い掛かる。

「日向！」

「貴様らの相手はこっちだ！」

近づこうとしたファイズとキバドッグフォームに鎌を振り下ろして介入してくるマンティスファンガイア。

「ちっ、これでも食らえ！」

キバはドッグフォームでは難しいと判断して緑色のフェッスルを取り出してキバットに読み取らせる。

『バツシャーマグナム！』

バツシャーマグナムを掴んで複眼が緑にチェンジして、バツシャーフォームに変化した。

ファイズはマンティスファンガイアと組み合う。

「一気に決める！」

『バツシャーバイト』

キバはバツシャーマグナムを読み取らせる。

直後、キバの足元から大量の水が溢れ出す。キババツシャーフォームの特殊能力疑似水中環境が展開され、必殺技を放つ。

『バツシャーアクアトルネード』

「甘いわ！」

キバの必殺技が当たるといふ直後、マンティスファンガイアの背中から巨大はサソリの尾が現れてキバをなぎ払う。  
なぎ払われた事により攻撃は外れてファイズも不意打ちを受けて殴

られる。

「ふ・・・ははははは。力が・・・力が溢れてくるううう  
ううううううううううう！」

『まずい。体内にあるコアメダルが暴走している！』

脳内で映司が危険を知らせる。

いわれなくてもマンティスファンガイアが放っている闘気からして  
恐ろしいことが起こりつつあるという事がわかった。

「なら・・・」

ファイズはファイズアクセルのミッションメモリーを外してプラッ  
トフォームに差し込んでアクセルフォームにチェンジする。

『Ready』

『ExceedCharge』

『Start・Up』

「これでもくらえ！」

高速空間に入ってアクセルクリムゾンスマッシュを放とうとする。  
しかし、マンティスファンガイアの全身が硬い鎧のようなもので阻  
まれてしまった。

「なに！？」

「そんなものきくかあああああああ！」

「ぐわっ！」

「音無さん！」

アクセルフォームからノーマルフォームに戻り地面に倒れたファイズにキバが駆け寄る。

「こういう場合はでかい技で叩き潰すっていうのはどうっすかね？」

「賛成……でも」

音無の最強フォームというのは先ほどのアクセルフォームであり、その攻撃が阻まれては攻撃が通るかどうかが怪しい。それにアクセルフォームを使用した後は冷却を行なうために連続でアクセルフォームは使用できない。

どうするか、悩んでいた音無の所に人型のロボットが腕の16門のガトリングマズルで12mm弾を連射する。

攻撃を受けたマンティスファンガイアは地面に倒れた。

その隙にオートバジンはファイズに向かって何かを投げる。

投げられたものは四角いケースのような道具を投げた。

「……ファイズブラスター」

ファイズはその道具の名前を明確に思い出せた。なぜか、名前が脳裏に浮かんたのである。

まるで前から使用していたかのような。

「（どういうわけか……使い方がわかる）」

「音無さん？」

「最強フォームの必殺技でヤツをしとめるぞ」

「おう！タツロット！」

「びゅんびゅーん！ようやく出番ですねー！ドラマチックにいきましょう」

そういつてタツロットがキバの全ての拘束具カタナを解放する。

鎧から黄金の翼が開き、無数のコウモリが空へ飛び立つ。キバは左手を真上へ挙げ、紅い止まり木にタツロットがとまり、最後の封印を解除した。

「《変身！》」

タツロットが叫んだ瞬間、空へ飛び立った蝙蝠が体に吸い込まれ、鎧が強固なものへと変わる。左手を強く振り下ろし、背中に炎と共に血のような紅いマントが出現する。

キバ本来の禍々しい複眼に、神々しい黄金の鎧。

その姿は黄金の皇帝。

キバ本来の姿。キバエンペラーフォーム。

ファイズはファイズブラスターに変身コードを再入力してスロット部分・トランスホルダーにファイズフォンをセットする。

『Awakening』

ドライバーに再起動させる。黒かったスーツの部分が赤く変化し、

フォトンストリームの部分がブラックアウトストリームに変化する。  
背部にはPFFというマルチユニットを装備している。  
フォトン・ワールド・フローター  
ファイズの最強形態・ブラスターフォーム。

「消えろお！」

背中からサソリの尾が次々と二人に襲い掛かってくる。

しかし、ダブルライダーは動きを見切って、右へ左へと回避していく。その間にファイズブラスターフォームはファイズブラスターをフォトンバスターモードに変形させてコード103を入力した。

『Blaster Mode』

フォトンバスターでマンティスファンガイアの尾を挟りとる。  
その隙にキバエンペラーフォームが間合いを詰めて連続パンチを叩き込み、回るようにしてキックを叩き込む。

「ぐおおおおおおおおお！？」

攻撃を受けてマンティスファンガイアの体がボロボロになる。  
しかし、ボロボロなのは敵だけではない。

キバエンペラーフォームは装着者のライフエナジーを吸い上げて驚異的な力を発揮する。

しかし、藤馬はファンガイアではなく普通の人間であるため長時間使用すれば死んでしまう。補うために強大な力を秘めたコアメダルが彼の体内でエネルギーを供給しているのだが、それにもデメリットがあり、コアメダルの力を使えば使うほど、藤馬の体は怪人へと姿を変えてしまう。

実際の所。彼の片腕は怪人となっていて、味覚・視覚などいろいろ

な物に影響を及ぼしている。

ファイズブラスターフォームも同じようにデメリットがある。最強フォームのスーツは全身からフォトンブラットを流出している状態であり触れたもの全てを灰に変えてしまうほどの威力を持つ。それは装着者の肉体を蝕み、最悪、命を縮める事となる。

だから、すぐに決着をつける必要がある二人は最大の必殺技を放つ体制に入る。

キバエンペラーフォームはタツロツトの頭部を引き胴体にある特殊な回転盤がキバの紋章の図で止まる。

『ウエイクアップファイバー』

タツロツトの声と共に両腕を顔の前に構えて広げる。

踵のルシファーズナイフが足裏に移動し、紅い魔皇力が体からあふれ出す。

ファイズブラスターフォームはファイズポインターを足にセットして、ファイズブラスターに5532と入力する。

『FaizPointer ExceedCharge』

右足を前に出してジャンプする体制に入る。

「はっ！」

ダブルライダーは同時にジャンプする。



「くらってたまるものか！」

マンティスファンガイアは両手を交差させて強大なシールドを展開しようとするがソレよりも早くファイズのキックがマンティスファンガイアの体に突き刺さる。

突き刺さると同時に赤い渦が吹き荒れて周囲をガリガリと破壊した。キバエンペラーの足から紅い翼のエネルギーが出現し、マンティスファンガイアへ両足蹴りを放ち、翼が生き物のように連続で蹴り続ける。

『強化クリムゾンスマッシュ』

『エンペラームーンブレイク』

二人のライダーの最大の必殺技を受けたマンティスファンガイアは大爆発を起こす。

ダブルライダーの背後にはキバの紋章と のマークが浮き上がる。

「っ！」

カイザと戦っていた武者鎧怪人はマンティスファンガイアがやられた事に気づいて巨大な一撃を振るう。

「うおっと!？」

攻撃を避けて反撃をしようとカイザブレイガンを向けるがそこに武者鎧怪人の姿はなかった。

「・・・逃げられたか・・・」

カイザは変身を解除する。

「がはっ・・・・・・・・中都君。生きているか？」

「ごほごほ・・・・・・・・なんとか・・・・・・・・そっちも生きていますか？」

「なんとか・・・・・・・・こんな連続でやったら命が足りないな・・・」

「でも・・・・・・・・」

二人とも大の字で地面に倒れて荒い呼吸のまま会話している。

「何も出来ず・・・・・・・・人を救えないかもしれないなら・・・・・・・・俺はこの力を何度も使いますよ。俺の体がボロボロになったとしても・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

藤馬の覚悟に音無は何を思ったのか、ポケットからドッグタグを取り出して藤馬に投げた。

「・・・・・・・・これは？」

「勲章・・・昔、工事現場で大怪我を負った人達を助けた時に子どもからもらったもの。これを見て時々思い出す・・・。自分が何をして誰を救ったのか」

「何をして・・・誰を救った・・・のか」

「今のキミを見ていたら不安になってさ。もしかしたら近いうち何か起こるかもしれない。

医者としての・・・いや、仮面ライダーとしての直感かな？持っておいてくれ、そしていつか返しに来てくれ。五体満足でね」

つまり、音無はまた会おうといっているのだと藤馬は理解する。

藤馬は桜ヶ丘を卒業したら別の世界へ旅立たないといけない。

異世界で暴れている怪人を倒すために。

帰ってこれる保証はない・・・。

それまでに大きな波乱があるかもしれない、その事を音無は知らないがどこか直感めいたものがあつた。

「わかりました。大事に持っておきます」

藤馬はドグタグを大事に手に持つ。

すると、彼の近くに銀色のオーロラが現れた。

「帰れるみたいですね」

「そうらしい・・・気をつけて帰れよ。“藤馬”」

「お世話になりました。“結弦”さん」

「さらばだ」

「またお会いしましょう」

二人は起き上がり拳をぶつけて、藤馬はキバットやタツロットたちと共にオーロラを潜る。

「行ったのか？」

「ああ・・・」

「また会えっかな？」

「会えるさ。お互い大事なものを見失うことなくしっかり生きていれば」

「んじゃ、俺らも帰るか」

「ああ」

音無と日向はその場所を離れる。

帰ったら色々とやらないといけないことがある。

診療所の修理など。

音無達はまた、異世界の仮面ライダーとの再会を思いつつ診療所へ足を運ぶ。

「そうか、残りカスはこちらに戻ってきたのか」

「申し訳ありません。キング。こちらの力不足です」

「構わん。どうやらしてやられたようだな・・・そちらの計画・・・狂いつつあるのではないか？」

「・・・修正の範囲内です」

苦しい言い訳。

実際の話、計画は狂ったで済ませられるような状況ではない。厄介としか言いようのないレベルを辿っている。だが、キングの前で男は表情を変えない。もし、ばれたら何をされるかわかったものではない。

「まあいい・・・中々に楽しいものだっただ」

「キングとしては遊びですか？あの戦いは」

「当然だ。貴様らの行動。計画。全て我からすれば遊びに過ぎない」

「（この男・・・敵に回したらいけない）」

男はキングの存在に戦慄した。

「……面白い」

フードをかぶっていた人物は手元にあるコアメダルを見て呟く。  
マンティスファンガイアの戦いに参加した際に、面白くなればいい。  
と考えて見つからないようにファンガイアの体内にコアメダルを一個、放り投げて強化させたのだが、ダブルライダーの攻撃を受けてコアメダルの力が失われたどころか破壊されてしまった。

「力が減った……まあいい」

壊れたコアメダルを投げ捨てて微笑む。

「面白い」

中都藤馬は瀕死の危機にあった。

エンペラーフォームといった強化フォームを使用した事への負担がデカかったという訳ではない。

自身の世界に戻ってきて前よりも傷だらけで帰ってきたがために仲間達に説教を受けているからというのが理由である。

「どこにいつていたの？ なっちゃん」

「えっと……体を動かしたかったので外に……」

「医者に聞きましたけど絶対安静といっていましたよ？先輩」

「えっと……」

「どうせまた無茶したんだろ……」

「少し反省する必要があるな。パンチ」

「ぶへら！」

「藤馬君。外に出たいなら私たちに相談すればよかったのに」

心配してくれる仲間達。

きつと、自分はまた無茶をするだろう。

人を守れないくらいなら死んだ方がマシだと思っているし。

でも、道を見失うなんてことはないだろう……このドッグタグを渡してくれた仮面ライダーの言葉を忘れない限り。

「ねえ、藤間君。気になっていたんだけど、そのドッグタグどうしたの？」

美紗は藤馬が握り締めているドッグタグを見て尋ねる。

ドッグタグには名前も何も書かれておらず、星のようなマークが描かれているだけのもの。

「遠い知り合いからも貰い物かな」

窓から見える空はとても青く澄み切っていた。

## 最強フォーム！（後書き）

今回でコラボは終わりです。

何気に今回登場した敵怪人はノブ君と同じ力を持っております。  
次回の更新はいつになるだろう。

今回はついに前作のオリキャラ澤田君が登場するかも？



## 澤田齋臥の日常（前書き）

澤田と・・・ヤツが登場する！

## 澤田齋臥の日常

「何か用？ノート」

「べつつにい、コアメダルは体内に埋め込んだのに何も異常ねえのかなあ？って思ってたさ」

「……異常なし」

「んだよ。つまんねえ……おつと。ちょおつと野暮用があつてこの町に来たんだけだよ」

「……野暮用？」

珍しく黒銀コートの人物が興味を示してノートという男はにやりと微笑む。

「夜の一族という存在がこの町にいるらしくてなあ。存在確かめたくなった。んで、協力しろ」

「……悪趣味。断る」

「なんとでもいえ。メモリ持ちじゃないヤツは大人しく従うって事忘れたの？」

「……」

コートに隠れて素顔は見えないが不機嫌な表情をしている。

「まあ、お前にやってほしいのは屑やミー出してもらう事だけだからそこまで手を貸さなくていいさ。さて、始めますか」

ノートは面白げに笑い。

黒銀コートの人物は、密かに報告しておこうと考えていた。

目覚ましが鳴り響く中、澤田斎臥は眠たそうな声を出して目を開ける。

「朝かぁ・・・ぐふ！」

起きようとしたら背中に一撃を受けてぐぐもった声を漏らす。

「起きたなら手伝え。僕は神だぞ」

「うん・・・ごめん」

澤田に攻撃してきたのは直井文人、この家を借りている片方である。二人は小さな家に住んでいてここから近くにある聖祥大学に通う学生。

どうして二人で住んでいるかという二人の方が家賃が安いから。高校からの付き合いで、直井の性格に慣れている澤田は気にする様子もなく二つ返事で生活する事をオーケーした。

付き合いの長い二人だったが、色々とお互いに知らない部分があった。最初は喧嘩したりしたが、澤田の性格により亀裂が入るような喧嘩をするまではいかない。

「んじゃ、行こうか」

「・・・ああ」

準備を終えて二人は家を出る。

聖祥大学。

家から近い理由というもので選んだ大学。

澤田と直井は同じ学部で講義を受けている。

昼休み。

「ふう・・・終わった」

「澤田く。あんたこの後暇？」

荷物を纏めて教室を出ようとした所で一人の女の子がやってくる。  
名前をアリサ・バニングズ。

「バニングズさん？ なにかな？」

「お昼ご飯一緒に食べない？ 直井も一緒に」

「え、いいけど、ちょっと聞いてみるね」

「わかったわ」

そういつてアリサは去っていくと同時に鋭い視線がいくつも澤田に刺さった。

「（アイドルに話しかけられただけでここまでの視線を受けるなんてついてないなあ）」

アリサ・バニングズ。この学園で知らぬものはいないといわれるくらいに可愛い女性でミス・聖祥候補といわれている。

いわれているというのは当人が一度も参加をしていないからだ。どうして参加しないのか当人曰く、面倒。らしい。

そんな有名人？と澤田がどうして知り合いなのかというと、彼のバイト先の常連だから。

彼がバイトとして働いている喫茶翠屋に常連としてやってきていて、そこで色々あつて知り合いになったのである。

嫌がる直井をつれて澤田はテラスに向かう。

テラスにはアリサ・バニングズの他に月村すずか、そしてひさ子さんがいた。

「ひさ子さん……いたんですか？」

「いちや悪いか？澤田あ」

「ぐえっ」

腕で首を絞められて澤田は苦しそうな声を漏らす。

直井は助けしてくれる気配がない。

さわ子は前からなにかと澤田にちょっかいをかけている。彼女曰く

「お前は俺のおもちや」みたいな主義を掲げている。

実際の所かなり被害にあっている。

アリサも同じようなことをしているのでいじめられキャラが定着しつつあった。

哀れな澤田はようやく解放されて椅子に座る。

「ねえ、明後日はどこに行く？」

「そういえば、前は海だったし、今度は山の方にあたしはいきたいなあ。アリサはどうしたい？」

「私もソレに賛成。そして、コテージを既に予約済みなのよ！」

「さっすがあ！」

「どうでもいいことなんだけど、ソレって絶対に参加しないといけないんだよね……僕達」

「そうよ。何かあるの？」

「翠屋のアルバイト」

「翠屋のアルバイトならお店のほうに確認を取ったから問題なし。それとも何か？あたしらと旅行行くの？そんなに嫌なわけ？」

ひさ子がぐいぐいと澤田の首を絞め始める。

いつの間に移動したのだろうか。

「といっても、私は岩沢とバンドの練習があるからいけないんだけどね」

「あ……そうなんだってギブギブ！」

「全く……直井。あんたも来るわよね？」

「当然だ．．．澤田が行くのなら僕も行く」

「直井．．．」

「こいつは僕にとって弄りがいのあるおもちゃだからな」

「最悪だよ！？キミは僕の友達なのか！」

「当然だ。友達（笑）だ」

「その（笑）はなに！？」

「二人とも仲いいね」

「とにかく！話を戻すわよ！明後日の朝にいつもの場所で合流！いわね！」

アリサの言葉で全員が頷く。

いつもと変わらない日常、だがすぐ傍に．．．じわじわと非日常が迫りつつある。

その事に気づいているものは少ない。

「．．．．．生きてる？」

薄暗い闇の中、一人の青年がゆっくりと目を開ける。  
闇が深すぎて自分がある場所がどのくらい広いのか、狭いのかもわ

からない。

「ああ．．．．．そつか、何があってもいいようにってどうでもいい  
考えで予備があっただんだけ？．．．．．ん．．．．．こいつは．．．．」

足元にコツンと当たった感触に体を動かして手を伸ばす。  
アタツシユケースが手にあった。

「こいつは．．．．．ああ、ラムダか．．．造ったのはいいが使用者  
が見つからず放置していたんだっけ？でも．．．．．なんでこれがあん  
だ？確か．．．．．あそつか。邪魔だからって近くに放置しておいた  
んだっけか．．．．」

ぶつぶつといいながら青年は持っていたアタツシユケースを放り投  
げた。

すると、ケースは暗闇に飲み込まれて消える。

「．．．．．寝よ」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7120y/>

---

新・仮面ライダーファイズAB！

2012年1月5日22時48分発行